

価値形態

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

61

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

149

(終了ページ / End Page)

233

(発行年 / Year)

1993-09-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008570>

Teinosuke Otani: The Form of Value
 KEIZAI-SHIRIN (The Hosei University Economic Review), Vol.61, No.2
 Hosei University, Tokyo, Japan, 1993

価値形態

大谷 禎之介

目 次

はじめに

第1節 価値形態論の課題

- §1 価値の本質から価値の現象形態へ
- §2 貨幣形態の謎と貨幣の謎

第2節 単純な価値形態の分析——価値形態の秘密——

- §1 単純な価値形態
- §2 価値表現の両極：相対的価値形態と等価形態
- §3 相対的価値形態
- §4 等価形態
- §5 単純な価値形態の総体

第3節 価値形態の展開——単純な価値形態から貨幣形態へ——

- §1 価値表現のメカニズムの分析から価値形態の展開へ
- §2 価値形態の論理的展開と価値形態の歴史的発展
- §3 単純な価値形態を潜ませている交換関係
- §4 価値形態の展開
 - A 単純な価値形態
 - B 全体的な、または開展された価値形態
 - C 一般的価値形態
 - D 貨幣形態

おわりに

はじめに

マルクスは『資本論』第1部の初版の序文で次のように書いている。

「なにごととも初めが困難だということは、どんな科学の場合でも言えることである。それゆえ第1章の、ことにそのうちの商品の分析を含む節の理解は、最大の困難となるであろう。ここでさらに立ち入って、価値実体と価値量との分析について言えば、私はこの分析を、できるだけ平易なものにした。価値形態の分析はそうはいかなかった。この分析は難解である。なぜなら、前のほうの叙述でよりも弁証法はるかに鋭くなっているからである。だから、弁証法的な思考になじみきっていない読者には、15 ページ（上から 19 行目）から 34 ページ末行までの部分はまったくとばして、その代わりに、巻末の付録「価値形態」を読まれるようにお勧めする。この付録では、問題の科学的な理解が許すかぎり、この問題を単純に、また教師風にさえ叙述することが、試みられている。付録を読み終わったら、読者は本文に戻って 35 ページから読み続けられよう。／貨幣形態をその完成した姿とする価値形態は、非常に無内容で単純である。それにもかかわらず、人間精神は二千年以上もまえからむなしくその解明に努めてきたのであり、しかも他方では、これよりもずっと内容豊富で複雑な諸形態の分析に、少なくともおおよそのところは成功したのである。なぜなのか？ 成育した身体は身体細胞よりも研究することが容易だからである。そのうえに、経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学試薬も使うことができない。抽象力がこの両方の代わりをしなければならぬ。ところが、ブルジョア社会にとっては、労働生産物の商品形態または商品の価値形態が経済的細胞形態なのである。教養のないものには、この形態の分析は、ただあれこれと細事の穿鑿をやっているだけのように見える。じっさいそこでは、細事の穿鑿が必要なのである。

しかしそれは、ちょうど顕微解剖学でそのような穿鑿が必要なと同じことでしかない。／それゆえ、価値形態に関する節を別とすれば、本書を難解だとして非難することはできないであろう。もちろん、私が読者に想定しているのは、なにか新しいことを学ぼうとし、したがって自分でも考えようとする人びとである。」（『資本論』第1部初版、MEGA, II/5, S.11-12, 強調—マルクス。）

『資本論』の第2版では、本文のなかの価値形態に関する節の叙述は、初版付録の「価値形態」に大きく手を入れたものと置き換えられ、付録の「価値形態」は削除された。だから、現行版の価値形態に関する節での叙述は、初版付録と同じく、「問題の科学的な理解が許すかぎり、この問題を単純に、また教師風にさえ叙述することが、試みられている」と言うことができる。

それにもかかわらず、『資本論』現行版での価値形態論も、事柄自体の難しさのために、依然として初学者にはきわめて難解なものにとどまっていると言わなければならない。そこで、『資本論』の内容を平易に解説しようとする人は、価値形態論をどのように取り扱ったらいいのか、頭を悩ますことになる。

この点について大きな示唆を与えるのが、ヨハン・モストの『資本と労働』の改訂にさいしてマルクス自身が書き加えた、価値形態についての記述¹⁾である。そこではマルクスは、交換関係の発展のなかでの価値形態の発展をあとづけながら、等価物の意味、したがって貨幣の意味を明らかにしただけで、価値形態の最も中心的内容である価値表現の回り道についての説明を含む、『資本論』での価値形態論の多くの論点をばっさりと省いている。つまりマルクスは、『資本論』の内容を平易に解説するさいには、価値形態についてこのような取り扱いをすることを許容していたのである。

そこで、初学者に社会経済学（マルクス経済学の経済原論）の講義を行なうさいに商品についてどのようなことを述べるべきかを考えた別稿²⁾で

は、価値形態について、おおむねこのマルクス自身の記述になったのであった。

けれども、『資本論』のなかでもとくに「弁証法が鋭くなっている」価値形態についての叙述は、専門の研究者にとってのみならず、それに近づくことができさえすれば、学生にとってもきわめて魅力的な研究対象であることはまちがいない。

そこで本稿では、学生が『資本論』そのものの価値形態論を理解することができるように、また学生が『資本論』の価値形態論を最後まで読み切ることができるように手助けすることを意識しながら、『資本論』におけるマルクスの価値形態論の内容を述べることにした。そうしたものとしては、本稿は前記別稿の【補論】の一つをなすものである。

本稿の骨格は、おおむね、『資本論』現行版および初版付録での価値形態論のそれに従って組み立ててある。両者の記述を、言い回しにわずかの手を加えるだけでそのまま利用したところもかなりある。また、初版の本文での記述を使って補うことができたところもある。

しかしまた、しばしば、マルクスの凝縮された叙述の含意を、さまざまな仕方で敷衍したり、場合によっては、マルクスの叙述とはやや異なった仕方で表現しなければならないところもあった。

そのようなときには、もちろん筆者の解釈が前面に出てくることになるが、価値形態論にかんする筆者の理解は、久留間蛟造氏の『価値形態論および交換過程論』ならびに『貨幣論』³⁾におけるそれと基本的に一致している⁴⁾。筆者は、氏が『マルクス経済学レキシコン』の貨幣篇(⑩～⑮)を編集されるさいに、協力者としてその作業にかかわることによって、きわめて多くの論点について氏の理解を確かめることができ、またそのなかできわめて多くのことを考えることができた。他方、若干の論点では、氏と筆者とのあいだに見解の違いがあって、長時間の論議を繰り返したのち最終的に意見の一致を見たところと、最後まで意見が分かれたままのところとがあった。その間の事情は『貨幣論』のなかでの氏と筆者との応答の

なかにある程度まで反映している。本稿で筆者が述べるのにも、基本的な点では久留間氏の理解と一致していると考えているけれども、筆者の独自の理解によるところがかなりある。さらに、久留間氏と議論をしていた当時にはよく分かっていなかったけれども、最近になってははっきりと分かってきた——と考えている——論点もある。

なお、依然として数多く生まれ続けている価値形態論にかんする諸論稿で、引き続き久留間氏の価値形態論が——あたかも腕試しの対象のように——俎上にのせられ、批判の対象とされているが、それらのなかには、久留間氏の主張を正確に理解しないで乱暴な議論をしているものが少なくないように感じられる。本稿では、注のなかで若干の論点に触れる以外には、それらについて一々指摘することはしない⁵⁾が、本稿が、久留間氏の主張についてのそのような誤解や無理解を正すことにもなにかの役に立つことを願っている。

- 1) ヨハン・モスト原著・カール・マルクス改訂・大谷楨之介訳『資本論入門（テキスト／コメンタール）』、岩波書店、1986年。『資本論入門・テキスト版』、岩波書店、1987年。
- 2) 「商品および商品生産」、『経済志林』本号（第61巻第2号）、1993年。
- 3) 久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』、岩波書店、1957年。久留間鮫造『貨幣論』、大月書店、1979年。
- 4) この問題領域についての久留間氏の理論の要諦を筆者がどのように理解しているかについては、「貨幣生成論の問題設定とその解明」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第8号、1989年10月、を参照されたい。
- 5) 拙見への批判および久留間氏の見解の批判にたいしては、その主要なものについて、別の機会に答えたいと考えている。

第1節 価値形態論の課題

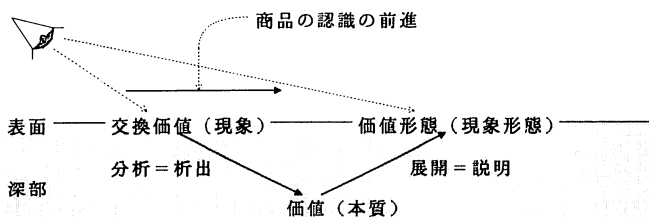
§1 価値の本質から価値の現象形態へ

われわれは、別稿で、商品の交換価値から価値を析出して、価値が抽象

的労働の対象化であることを知り、さらに価値の大きさは社会的必要労働時間によってきまることが分かった。そのなかで、商品の価値は、人間の外部にある物の「属性」でありながら、しかもまったく社会的な性質のものであることも明らかとなった¹⁾。

こうしてわれわれは、分析によって交換価値という現象から価値という本質をつかみだし、交換価値が価値の現象形態であったことを明らかにしたので、ふたたびこの現象形態、つまり交換価値に戻って、それを観察しなければならない。これは出発点の交換価値にふたたび帰ることであるが、しかし最初に交換価値を見たときには、われわれはまだ、それが価値という本質の現象形態であることを知らなかったのにたいして、いまではわれわれは、交換価値に現象している本質が、対象化した抽象的労働である価値であることを知っているのだから、交換価値を観察すると言っても、もとのところにとただ戻る、ということではなくて、そこに現象している本質についてすでに得られた知識をもって、その現象形態をあらためて吟味する、ということになるのである（第1図）。

第1図 価値（本質）から価値の現象形態を展開する

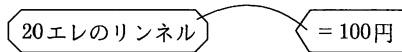


われわれが最初に交換価値を見たとき、ある商品の交換価値とは、この商品と交換される他商品の量であったが、そのさい図のなかに、この他商品と並べて貨幣も掲げておいた²⁾。じつは、商品に等置される貨幣の量つまり「価格」こそが、資本主義社会における商品の価値の一般的で支配的な現象形態なのである。ある商品の交換価値をその商品と交換される商品の量だ、ととらえること自体が、じつは売買の関係つまり商品と貨幣との

交換のなかから、貨幣を度外視することによって商品相互間の関係を取り出す、という抽象を行なうことなのであった。

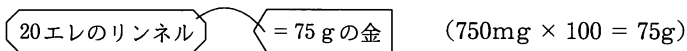
そこでいま、商品の価値が貨幣として現われている形態、商品の価値を貨幣が表現している形態を観察してみよう。

商店の店先に並んでいる商品には値札（^{ねふだ}しやうふだ）（正札）がついているものがあるが、ついていなくても、聞けばそれが売り物であるかどうか、またその価格がわかる。たとえば、こうである。



100 円というこの値札に書かれているのが 20 エレのリンネルの価格である。価格とは、商品が、「これこれの貨幣は私の価値と同じです、だから、これこれの貨幣となら直ちに交換します」と言っているものである。つまりどんな使用価値も、その現物形態に加えて価格という形態をもつことによって、それが商品であることを見てとれる形態をもつことになっている。

さて、わが国の「貨幣法」（1987 年廃止）はその第 2 条で、「純金の量目 750mg を以て価格の単位と^なし之を^{これ}円と称す」、と規定していた。つまり「円」とは、もともとは、貨幣である金の 750mg につけられた貨幣名だった。そこでいま、1 円 = 750mg の金 であるとすれば、上の値札は、



ということにほかならない。このように、商品は値札をもつことで、そこに書かれた量の貨幣とであれば直ちに交換する、ということを表示しているのである。

それでは、この商品はなぜ、そこに書かれた量の貨幣とであれば直ちに交換する、と言うのであろうか。なぜ、これよりも少ない量の貨幣ではだめなのであろうか。それは、われわれがすでに見たように、商品にはある大きさの価値が含まれていて、価格はこの価値の大きさを表現しているも

のなのだからである³⁾。つまり、この値札によって1エレのリンネルは、「75gの金の価値は自分の価値と同じだ、だから、75gの金とならば直ちに交換する」、と言っているわけである⁴⁾。

- 1) 「商品および商品生産」、『経済志林』本号（第61巻第2号）、1993年、の第1節「商品」を参照されたい。
- 2) 同前、第5図、を参照されたい。
- 3) 同前、第1節§2「商品の価値」を参照されたい。
- 4) 「これこれの貨幣は自分の価値と同じだ、だからこれこれの貨幣となら直ちに交換する」、と言うのは、商品所持者ではなくて、商品それ自身である。商品は意志も口ももつことはないにもかかわらず、商品生産者の社会では、別稿（同前、第3節§2「人格の物象化と物神崇拜」）で述べたように、人と人との関係が物象と物象との関係として現われるのである。この価値形態の分析では、主体としての商品が、他の商品にたいして関わることによって、自己および他商品に独自の価値形態を与える関係そのものが対象となっているのであって、そこはいわば商品語が語られる世界なのである。価値形態をもつのは、商品所持者ではなくて商品である。また、価値表現の主体も商品であって、商品所持者ではない。いわんや、それが分析を行なう観察者としてのわれわれでないことは明らかである。

§2 貨幣形態の謎と貨幣の謎

商品にこのような値札がついているのは、われわれの日常感覚からすれば、なんの変哲もない、どんな不思議さも感じさせない、ごく自然のことに見えるが、商品についてのわれわれのこれまでの分析によって得られた知識——とくに使用価値と価値とについての知識——によって考えてみるならば、まことに奇妙なことである¹⁾。

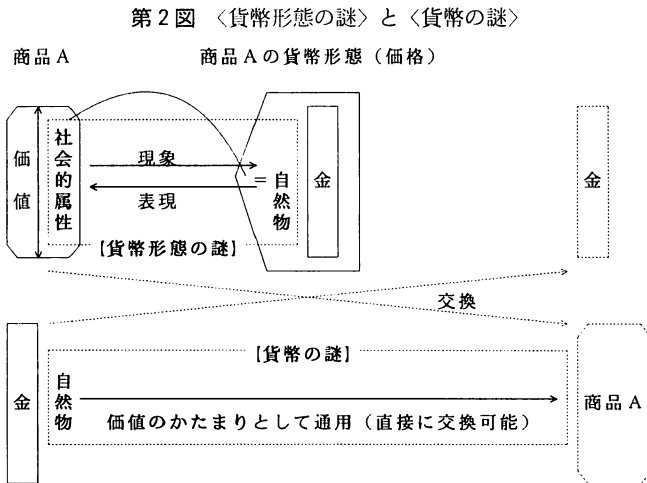
「75gの金」というのは、金という使用価値の一定量だから、ここでは商品（リンネル）の価値が、他の商品（金）の使用価値の一定量で表現されているわけである。つまり、価値というまったく社会的なものが、使用価値としての、物としての金の分量で表現されているのである。

物である金（Au）の量が価値の量を表現する、というようなことが

いったいどのようにして可能なのであろうか。これは、われわれのこれまでの分析で得たところから見ると、一つの謎だと言わなければならない。ここでは商品の価値が貨幣という形態を取っているのだから、この謎を〈貨幣形態の謎〉と呼ぶ²⁾。

さらに、商品はすべて、20 エレのリンネル = 100 円、1 着のシャツ = 40 円、1t の鉄 = 10 万円、等々といった価格をもっており、すべての商品の価値が金の一定量で表現されているので、金はあらゆる商品と直接に交換できる。つまり、金は、その現物形態そのものが価値物として、価値のかたまりとして通用する、一種独特のものとなっている。

ここにも一つの謎がある。物である金、使用価値としての金、その反対物である価値そのものとして通用することの謎、〈貨幣の謎〉である（第2図）。



だから、商品の現象形態である交換価値に立ち戻って、これまでに得た商品についての知識にもとづいてこの現象形態を説明する（展開する）ということは、同時にそのなかで、貨幣形態の謎および貨幣の謎を解く、ということでもあるのである。

すでに序論で述べたように、ある事象を分析して、その事象の本質を把握し、その事象がこの本質の現象形態であることをつきとめたとしても、それだけでこの事象が理解できたとは言えない。把握された本質は、出発点であった現象形態にそのままのかたちで現われてはいなかったのであり、だからこそ、その把握に分析を必要としたのである。だから、本質が把握されれば、それはまず、出発点であった現象形態と一致しないように見えるのがむしろ当然である。この不一致は、認識の過程として見れば、解かれるべき「謎」なのであり、この「謎」を解いてこの不一致を解消させることが、われわれが本質を把握したのちに、ただちに当面する課題である。そして、この「謎」の解明は、本質からその現象形態を展開すること、言い換えれば本質の認識にもとづいて諸現象を説明すること、本質の転倒的形態の必然性をその本質そのものから明らかにすることによって成し遂げられるのである。このような、〈現象形態の分析〉→〈本質の把握〉→〈「謎」の浮上〉→〈現象形態の展開による「謎」の解明〉、という認識の筋道は、だから、いま問題にしている価値形態の認識に限られるものではなく、どのような事象の認識についても共通のものだと言わなければならない。

ここで、三つのことを注意しておきたい。

第1に、われわれがいま当面している「謎」がこのようなものであるとすれば、この「謎」は、われわれが最初に現象形態に接したときから「謎」としてあったわけではない、ということである。つまり、そこに現象していた本質が把握されたからこそ、本質と現象形態との不一致が「謎」として浮び上がってきたのである。このような、本質の把握ののちに解かれるべき課題としての「謎」と、貨幣にまつわりついており、人びとの日常的な意識にのぼっている、どことなく謎めいて見える性格とは、はっきりと区別されなければならない。

第2に、われわれが最初に現象形態を分析して本質を析出するときには、われわれにはまだ本質は分かっていなかったのだから、そこでは、本

質がどのように現われるのか、ということはまだ問題になりようがなく、現象形態そのものがどのようなものか、ということはまだ関心の的になりえなかったのであって、もっぱら、この形態から本質をつかみだすことに全力を集中したのであった。それにたいして、いまは、つまり本質から現象形態を展開するときには、本質はすでに既知のものとして前提して、われわれの関心を形態そのものに集中する。そして、ここではじめて、本質の認識にもとづいて現象形態そのものを分析することになる。言い換えれば、本質が現象形態として現われるさいのその仕方様式そのものが分析されるのである。だから、現象形態はすでに与えられているのであって、ここでの本質からの現象形態の展開とは、あくまでも、このように与えられている現象形態の分析なのであって、本質から形態を演繹的、自己展開的に導出するといったものではまったくない。

そこで第3に、このような現象形態の分析と展開とを通じて現象形態がよく理解されることによって、そこに現象する本質についての認識も深まることはたしかであるが、そのことは、本質がここではじめて把握される、ということの意味するものではなく、あくまでも、本質の認識はすでに与えられているのだ、と考えられなければならない。価値形態について言えば、その分析、展開には、価値という本質の認識が、つまり価値概念がすでに与えられているのであって、これなしには、それが現象する形態の分析、展開はありえない。価値形態の展開のなかで価値概念がどれだけ「豊富」になるとしても、それはけっして、この分析、展開の結果はじめて価値概念が得られる、ということの意味するものではないのである。

さて、貨幣形態および貨幣のなかに解かれるべき謎を見いだして、これを完全に解いたのはマルクスであった。マルクスは、商品の価値形態を、完成した貨幣形態から最も単純な価値形態にまで還元して、この最も単純な価値形態を徹底的に分析し、ここで貨幣形態の謎と貨幣の謎との根幹を明らかにし、そのうえでこの最も単純な価値形態から貨幣形態までの発展過程を明らかにして、貨幣形態と貨幣との生成を示し、貨幣形態の謎と貨

幣の謎とを消滅させたのである。ここでは、『資本論』第1部第1章第3節でのマルクスの叙述にそって、すでに得られた価値という本質の認識にもとづいて、価値形態というその現象形態を分析し、展開しよう。

- 1) 商品の二要因である使用価値と価値とについて明確な認識をもったときにはじめて、商品がそのような値札をもっていることが奇妙に見えるようになる。そのような知識をもたなければ、商品が値札をもつことはしごく当り前のことなのであって、奇妙とも不思議とも思われないのがむしろ当然なのである。資本主義社会のもろもろの経済的現象について、同じことが言える。この社会に科学的なメスを入れるようになってはじめて、この社会は、不可解さにあふれるもの、解かれるべき謎に満ちたものに見え始める。経済的三位一体の定式に囚われてそこに安住している日常的な意識にとっては、さまざまな経済現象は、わからないことだらけながらも、しごく当り前のこととしか見えないのである。
- 2) 「貨幣形態の謎」という表現は久留間鮫造氏によるものである。マルクスは、「貨幣の謎」と言っているが、「貨幣形態の謎」ということは言っていない。しかし、久留間氏のこの命名は、マルクスの問題意識を鮮明にする、きわめて適切な定式化であった。

第2節 単純な価値形態の分析——価値形態の秘密——

§1 単純な価値形態

価値の現象形態である価値形態の分析にとりかかるにあたって、なによりもまず留意しなければならないのは、この形態が商品相互の交換関係のなかに潜んでいるのだということ、だから、価値形態の分析は、まずもって商品の交換関係からの価値形態の析出を前提する、ということである。われわれが分析する価値形態は、交換関係とはまったく無関係に頭のなかでつくりあげてみる形態なのではなく、必ずなんらかの交換関係のなかにある形態でなければならないのである。

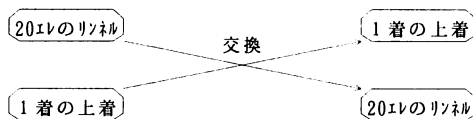
それでは、われわれが取り上げるべき価値形態とは、商品のどのような交換関係のなかに潜んでいるのであろうか。われわれのこれまでの分析に

登場している商品は、どれをとっても同じもの、つまり使用価値および価値をもって交換の場に登場している労働生産物である。だからわれわれは、まずもってそのような商品のあいだの交換関係を取りあげ、そのなかに潜んでいる価値形態を分析しなければならない。そのさい、われわれが最初に交換価値を分析したときにもそうしたように、当然に最も単純な交換関係を取りあげなければならない。そのような関係が、なんであろうとある一つの商品と他の一つの異種の商品との交換関係であることはまったく明らかである。だからわれわれは、なによりもまず、このような二つの商品の交換関係に潜んでいる価値形態を取り上げなければならないのである。

そこでまず、最も単純な交換関係、つまりただ二つの商品の交換関係のなかから、ここに潜んでいる価値形態を取り出すことにしよう。

たとえば、20 エレのリンネルと 1 着の上着との交換関係をとってみる(第3図)。

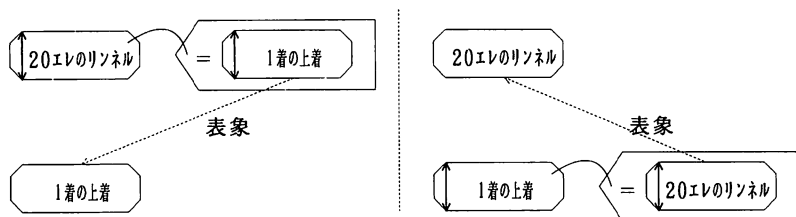
第3図 最も単純な交換関係



この交換が実際に行なわれるためには、その前に、20 エレのリンネルの側では、「1 着の上着は自分に値するだけの価値をもっている、だから 1 着の上着となら直ちに交換する」と言い、1 着の上着の側でも、「20 エレのリンネルは自分に値するだけの価値をもっている、だから 20 エレのリンネルとなら直ちに交換する」と言っているのだからなければならない。これは、言い換えれば、どちらの商品も他方の商品にたいして、あなたが私に見合うだけの価値をもっていることを認めます、と言って関わっている関係があるということである。いま、それぞれの商品が、あなたは私に見合うだけの価値をもっています、ということ、を、自分に一つの札をつけて表

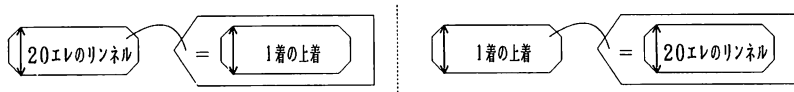
わずとすれば、その札を通じてそれぞれの商品是他方の商品にたいして、価値の点において関係をもつことになる（第4図）。

第4図 2商品の交換関係に含まれている二つの価値関係



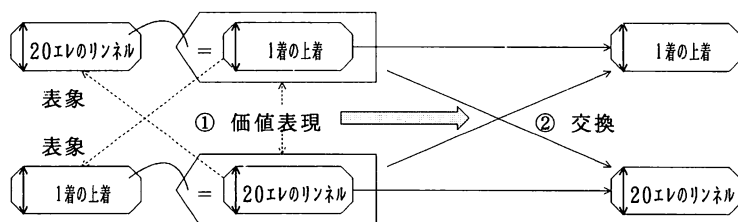
このように、商品が他の商品にたいして、価値の点においてもつ関係を価値関係と言う。このような商品の価値関係が必ずあって、そのうえではじめて交換が行なわれるのである。だから、交換関係は価値関係を含んでいるのであって、価値関係は交換関係の前提なのである。そしてさらに、この二つの価値関係には、それぞれ次のような、それぞれの商品の側からする自分の価値の表現が含まれている（第5図）。

第5図 単純な交換関係に含まれている価値表現＝価値形態



そこで、2商品の交換関係にこの価値表現を加えて図示すれば、次のようになる（第6図）。ここからは、双方の価値表現が交換の前提となって

第6図 交換関係は価値表現を前提する



おり、実際に交換が行なわれることによって、双方の側で、価値表現において観念的に表象されていた（思い描かれていた）商品が現実の商品に転化する、つまり実現（realize）されることを明らかに見てとることができる。

もちろん、この二つの価値表現が成立したのは、20 エレのリンネルの所持者（人格）が上着にたいする欲求をもち、1 着の上着の所持者（人格）がリンネルにたいする欲求をもっていたからである。けれども、ここでわれわれが分析しなければならないのは、成立している価値表現の形態そのものであって、その成立の経緯ではない。だから、ここにある二つの価値表現はまったく同じ形態のものである。つまり、どちらも、ある一商品が自分とは異なるなんらかの他の一商品で自分の価値を表現している、という形態となっているのである。

x 量の商品 A は y 量の商品 B に値する、というこの形態が、最も単純な価値表現であり、価値がとる最も単純な形態、つまり単純な価値形態である。これは明らかに等置であるが、なにについて等しいとされているかと言えば、それは価値についてでしかない。そこで、そのことを図示するなら、次のようになる（第 7 図）。

第 7 図 単純な価値表現＝単純な価値形態



この価値表現を簡略化して示すとき、 $x \text{ 量の商品 A} = y \text{ 量の商品 B}$ と記すことにしよう。

以上見てきたように、二つの商品の交換関係のなかには、一商品の他の一商品にたいする価値関係が含まれており、そしてこの価値関係のなかにも最も単純な価値表現が潜んでいるのである¹⁾。これからこの単純な価値形態の分析にかかるのであるが、その単純な価値形態とは、このように、商品の一定の交換関係または価値関係のなかからつかみだされたものである

ことを忘れないようにしよう²⁾。

- 1) 『資本論』初版の付録では、単純な価値形態の分析にはいる直前のところで、分析されるべき単純な価値形態が二つの商品のあいだの関係のなかに潜んでいるものであることが、次のように述べられている。

「ところで、一商品の価値はどのようにして表現されるのであろうか？
つまり、価値はどのようにして自己自身の現象形態を得るのであろうか？
さまざまな商品の関係によってである。そのような関係のなかに含まれて
いる形態を正しく分析するためには、われわれはその形態の最も単純な未
発展な姿から出発しなければならない。一商品の最も単純な関係は、明ら
かに、なんであるかを問わずただ一つの他の商品にたいするその商品の関
係である。それゆえ、二つの商品の関係は、一商品のための最も単純な
価値表現を与えるのである。」（『資本論』第1部初版，MEGA，II/5，S. 626，強調－引用者。）

ここで「諸商品の関係」と言われているものが諸商品の価値関係にほかならないことは、『資本論』現行版で、同じく単純な価値形態の分析の直前に置かれている次の記述から明らかである。

「諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対照をなしている一つの共通な価値形態をもっているということだけは、だれでも、ほかのことはなにも知ってなくても、よく知っていることである——すなわち、貨幣形態である。しかし、いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この貨幣形態の生成を示すことである。したがって、諸商品の価値
関係に含まれている価値表現の発展をその最も目だたない姿から光まばゆ
い貨幣形態に至るまで追跡することである。これによって同時に貨幣の謎
も消え去るのである。／最も単純な価値関係は、明らかに、なんであろう
とただ一つの異種の商品にたいするある一つの商品の価値関係である。そ
れゆえ、二つの商品の価値関係は、一商品のための最も単純な価値表現を
与えるのである。」（『資本論』第1部，MEGA，II/10，S.49，強調－引用者。）

また現行版では、相対的価値形態と等価値形態との分析とが終わり、単純な価値形態の全体を見ようとするところで、次のように述べている。

「一商品の単純な価値形態は、異種の一商品にたいするその商品の価値
関係のうちに、または異種の一商品との交換関係のうちに含まれている。
……商品は、その価値が商品の現物形態とは異なる独特な現象形態、す

なわち交換価値という現象形態をもつとき、そのあるがままのこのような二重物として現われるのであって、商品は、孤立的に考察されたのでは、交換価値というこの形態をけっしてもたないものであり、つねにただ、第2の異種の一商品にたいする価値関係または交換関係のなかでのみこの形態をもつのである。」(『資本論』第1部、MEGA, II/10, S.61, 強調—引用者。)

さらにきわめて示唆的かつ重要であるのは、初版付録で相対的価値形態と等価値形態との対極性を述べたところで、両形態が互いに排除しあうことについて、次のように述べていることである。

「リンネル生産者 A と上着生産者 B とのあいだの物物交換を考えてみよう。彼らの商談がまとまるまえには、A は、20 エレのリンネルは2 着の上着に値する(20 エレのリンネル=2 着の上着)と言い、これにたいして B は、1 着の上着は22 エレのリンネルに値する(1 着の上着=22 エレのリンネル)と言う。長いあいだ商談したあげく、最後に彼らは一致する。A は、20 エレのリンネルは1 着の上着に値する、と言い、B は、1 着の上着は20 エレのリンネルに値する、と言うのである。この場合には、リンネルと上着のどちらも、同時に、相対的価値形態にあるとともに等価値形態にある。だが、注意せよ、それは二人の別々の人にとってのことであり、また、二つの別々の価値表現においてのことなのであって、それらがただ同時に現われるだけのことなのである。A にとっては、彼のリンネルは相対的価値形態にあり——というのは彼にとってはイニシアティブは彼の商品から出ているのだから——、これにたいして、相手の商品、上着は等価値形態にある。B の立場からすれば、これとは逆である。だから、同じ商品はどんな場合にも、この場合にもやはり、同じ価値表現において両方の形態を同時にもっていることはけっしてないのである。」(『資本論』第1部初版付録、MEGA, II/5, S.628, 強調—引用者。)

- 2) 念のために、次のことを付け加えておこう。ここで取り上げる二つの商品のあいだの交換関係とは、歴史的に交換の端緒に見られる物物交換のことではない。ここでの商品は、さきに商品を分析して価値をつかみだしたさいにもそうであったように、発展した資本主義的生産のもとで労働生産物が取っている形態としての商品である。ただし、それは、論理的にまだ貨幣形態をとっていないのだから、そのかぎりではその商品形態は未発展なものであり、そのような商品相互の関係も、未発展なものであるほかはないのである。また、ここで想定される交換関係も、発展した資本主義的生産のもとでの交換関係から抽象されたものなのではあるが、それがそのように「抽象されたもの」であるのは、

いま述べたような商品を前提し、それらの交換関係を想定したものだ、というかぎりにおいてそうなのである。それは、まず諸商品が相互に全面的に譲渡しあっている交換関係を——貨幣の媒介だけを捨象して——想定し、そのなかから二つの商品の交換関係だけを取り出して見ている、といった仕方で〈抽象〉されたものではまったくない。そのような商品の全面的な交換関係は、貨幣の成立なしには、歴史的にのみならず論理的にも存在しようがないのである。のちに触れる、単純な価値形態から開展された価値形態を経て一般的価値形態に至る展開を、このような想定から説明しようとする議論があるようであるが、それは、論理的展開における〈抽象〉の意味を取り違えているものだと言わなければならない。

§ 2 価値表現の両極：相対的価値形態と等価形態

x 量の商品 A — $\boxed{= y \text{ 量の商品 B}}$ という等式では、両辺の商品、われわれの例では 20 エレのリンネルと 1 着の上着とは、明らかに違った役割を演じている。リンネルは自分の価値を上着で表わしており、上着はこの価値表現の材料として役だっている。前者は能動的な役割を演じ、後者は受動的な役割を演じている。

等式の左辺の商品は、その価値を他商品との関係において、つまり相対的に表現している。その価値は相対的価値として表わされているのである。そこで、この左辺の位置にある商品は〈相対的価値形態〉にある、と言う。

等式の右辺の商品は、左辺の商品にとって価値が等しいもの、つまり〈等価物〉として機能している。そこで、この右辺の位置にある商品は〈等価形態〉にある、と言う。

さきに見たように、20 エレのリンネル — $\boxed{= 1 \text{ 着の上着}}$ という価値表現は、それが現実の交換関係からつかみだされた（抽象された）ものであるかぎりは、20 エレのリンネルと 1 着の上着との交換関係を前提するのであり、したがって他方には、1 着の上着 — $\boxed{= 20 \text{ エレのリンネル}}$ という価値表現が存在しているはずである。けれども、この二つの価値表現は、

その形態だけを取ってみると、 x 量の商品 A $-$ $\boxed{= y \text{ 量の商品 B}}$ という、まったく同じ内容をもつ等式である。だから、われわれはここでは、この価値表現の例として、前者だけを取ることにしよう。

ここで注意しなければならないのは、第一に、 $- \boxed{= y \text{ 量の商品 B}}$ という価値表現は、 x 量の商品 A が自分につけている（あるいはだれかの口を通して伝えられるのであろう）いわば〈正札〉なのであって、現物の y 量の商品 B が実際に置かれているわけではないということ¹⁾である。

$- \boxed{= y \text{ 量の商品 B}}$ という価値表現における商品 B は、現物の商品 B をもってきてそれをそこに等置しているのではなく、現実存在している商品 B を表象している（思い描いている）ものであって、商品所持者にとっては、観念的なもの、表象された（思い描かれたもの）ものでしかないのである。

第二に、それにもかかわらず、この〈正札〉に書かれている（あるいはだれかの口を通して伝えられる）、言い換えればこの〈正札〉が表象している y 量の商品 B は、現実存在している現物の商品 B を表象しているのだということ²⁾である。等価形態にあるのは商品 B であるが、その商品 B は、〈正札〉に書かれている観念的なそれではない。現実存在している商品 B が、その現物形態のままで、等価形態を受け取っているのである。

この二つのことは、価値表現が価値関係のなかに含まれていることを想起するれば、明らかである。そこで、二つの商品の価値関係とそこに含まれている価値表現をあらためて図示すれば、次のとおりである（第 8 図）。商品 A の商品 B にたいする価値関係のなかで、商品 A は自己の価値を商品 B で表現している。これは、すでに述べたように、簡略化するなら、

$$\text{商品 A} - \boxed{= \text{商品 B}}$$

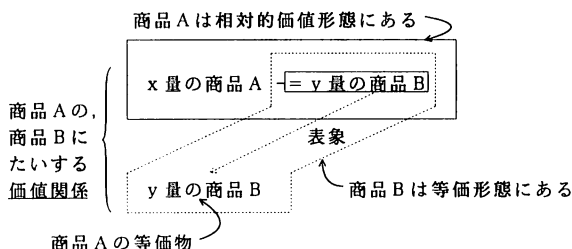
と書き表わすことができる。それにたいして、この価値表現のなかの商品 B は、この価値表現があろうとなかろうと現実存在している商品 B を表象しているのであって、この商品 B が等価形態をとっているのである。

商品 B が等価形態にあることを簡略化して示すときには、

$$-\boxed{=} \rightarrow \text{商品 B}$$

と記すことにしよう。

第 8 図 価値形態の両極——相対的価値形態と等価形態

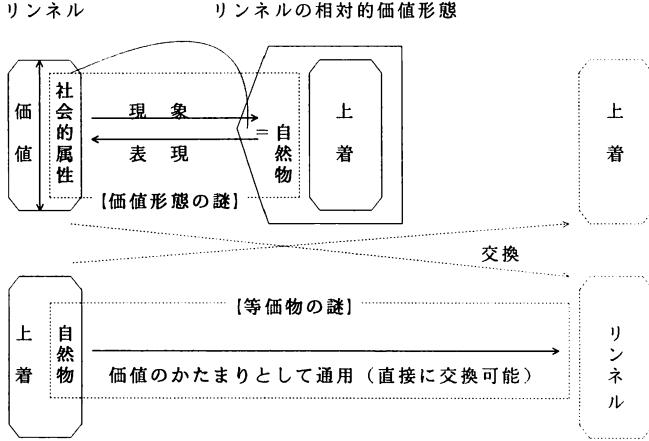


ここで注目すべきことは、1 着の上着 $-\boxed{=} 20 \text{ エレのリンネル}$ というこの形態で、商品（リンネル）の価値の大きさを表現しているのは、他商品（上着）の使用価値の一定量だということである。つまり、価値というまったく社会的なものが、使用価値としての、物としての上着の分量で表現されているのである。使用価値と価値とについてわれわれがこれまでに得た知識からすれば、価値の量を使用価値の量が表現する、というのは、いったいどのようにしてであるのか、という疑問が生じる。これはじつは、さきに見た〈貨幣形態の謎〉を最も単純な形態に還元したものであり、〈価値形態の謎〉と呼ぶことができる。

さらに、ここでは 20 エレのリンネルが $-\boxed{=} 1 \text{ 着の上着}$ という価値表現をもっていて、20 エレのリンネルの価値が 1 着の上着で表現されるときには、現実存在している 1 着の上着は直ちに 20 エレのリンネルと交換できる。つまりこの価値関係のなかでは、1 着の上着は、 $-\boxed{=} \rightarrow \text{上着}$ という形態を与えられることによって、その現物形態そのものが価値そのものとして、価値のかたまりとして通用するという、特別のものとなっているのである。ここにもう一つの謎がある。物としての上着、使用価値としての上着がその反対物である価値そのものとして通用すること

の謎、〈等価物の謎〉である。この謎は、さきに見た〈貨幣の謎〉を最も単純な形態に還元したものにほかならない（第9図）。

第9図 〈価値形態の謎〉と〈等価物の謎〉



したがって、ここでわれわれは、貨幣形態の謎および貨幣の謎を、その最も単純な形態に還元したかたちでもっているわけである。これらの〈謎〉は、認識された本質とそれの現象との矛盾である。といっても、それは事物そのものに内在する矛盾ではなくて、認識の過程で必然的に生じる論理的な矛盾である。この現象を本質そのものの本性から説明することが、この矛盾を解消することであり、現象そのものを認識することである。だから、単純な価値形態の分析によってわれわれが成し遂げなければならないのは、なによりもまず、〈価値形態の謎〉および〈等価形態の謎〉を明らかにすること、価値の現象形態を価値の本性にもとづいて説明することなのである。

- 1) マルクスはのちに、貨幣の価値尺度機能のところで次のように書いている。
「諸商品の価格または貨幣形態は、諸商品の価値形態一般と同様に、それらの、手につかめる実在的な〔reell〕物体形態からは区別された、し

たがってたんに観念的な [ideell], または表象された [vorgestellt] 形態である。……商品諸価値の金による表現は観念的なものだから、この操作のためにも、ただ表象されただけの、すなわち観念的な金を用いることができる。……貨幣がその価値尺度機能で役立つのは、ただ表象されただけの、すなわち観念的な貨幣としてなのである。」(『資本論』第1部, MEGA, II/10, S.91, 強調—引用者。)

ここでは、商品所有者にとっては、商品の価値表現、したがって商品の相対的価値形態は「観念的なもの」なのであり、ある商品が価値表現の材料として役立つのは、「ただ表象されただけの、すなわち観念的な」等価物としてであり、総じて商品の価値形態は、「たんに観念的な、または表象された形態」なのだ、ということが、明示的に述べられている。だからこそ、「商品の番人〔つまり商品所有者〕は、これらのものの価格を外界に伝えるためには、自分の舌をこれらの物の頭のなかに突っ込む〔すなわち自分の口で伝える〕か、またはこれらの物に紙札をぶらさげるかしなければならない」(同前)のである。

- 2) 前注に述べたことから、等価形態に置かれ、等価物となっている商品そのものがたんに観念的なもの、表象されただけのものであって、現実に存在する必要はない、と考えられてはならない。等価物として「表象されている」のは実在的な商品なのであり、その実在的な商品が等価物という形態を与えられ、そのような形態をもつのである。貨幣について言えば、金は諸商品の価格の外部に実在的に存在している。価格に「表象されている」のは、まさに、この実在的に存在している金なのである。単純な価値形態においても同様である。20 エレのリンネル $-\boxed{=1 \text{ 着の上着}}$ という 20 エレのリンネルの価値表現のなかでは、1 着の上着はただ表象されているだけの観念的なものであるが、そこに表象されているのは、この価値表現の外部に実在している 1 着の上着である。すなわち、等価物として役立っているのは $-\boxed{=1 \text{ 着の上着}}$ ではなくて、 $-\boxed{=}$ → 上着 という形態にある実在の上着である。ただ、20 エレのリンネルが $-\boxed{=1 \text{ 着の上着}}$ という価値表現をもつとき、そこには実在の上着が置かれているわけでも、置かれている必要もまったくない、ということなのである。

ただし、価格形態の場合と単純な価値形態の場合とでは、次の点で異なっている。すなわち、価格形態の場合には、金は個々の商品の価格形態とは独立にすでに貨幣となっているのにたいして、単純な価値形態の場合には、20 エレのリンネル $-\boxed{=1 \text{ 着の上着}}$ という価値表現が 1 着の上着に等価物という形態を与えるのであって、この価値表現なしには上着は等価物という規定性をもたない、という点である。

§ 3 相対的価値形態

(1) 価値表現のメカニズム

さて、いま解かれなければならない最も重要な問題は、どのようにして商品は、自分の価値を他の商品の使用価値で表現するのか、という問題、つまり価値形態の謎である。この問題の解明は〈価値表現のメカニズム〉の解明とも呼ばれている。

この問題を解明するためには、20 エレのリンネル $- \boxed{= 1 \text{ 着の上着}}$ という等式のなかにある量的な規定性をひとまず度外視して、この等式の質的な内容を明らかにしなければならない。つまり、20 エレのリンネル $- \boxed{= 1 \text{ 着の上着}}$ であろうと、 $- \boxed{= 2 \text{ 着の上着}}$ であろうと、 $- \boxed{= x \text{ 着の上着}}$ であろうと、これらのどの等式にあっても、その等号は、左辺のリンネルと右辺の上着とが等量の価値をもっていることを意味しており、どちらも同じ性質（価値）をもったものであることを前提している。すなわち、リンネル $- \boxed{= \text{上着}}$ がこの等式の基礎となっているのである。

それでは、リンネルが上着を自分に、価値において等しいとして等置しているこの等式によって、リンネルの価値がどのようにして表現されているのであろうか。

これについては、ひとまず——いささかぎごちないが厳密さを優先させた表現で言えば——、〈リンネルは、それが上着にたいして、上着は自分の等価物であると認める様態¹⁾で、すなわち自分と直ちに交換できるものであると認める様態で連関すること、関わることによって、自分の価値を上着で表現しているのだ〉、と答えることができる。

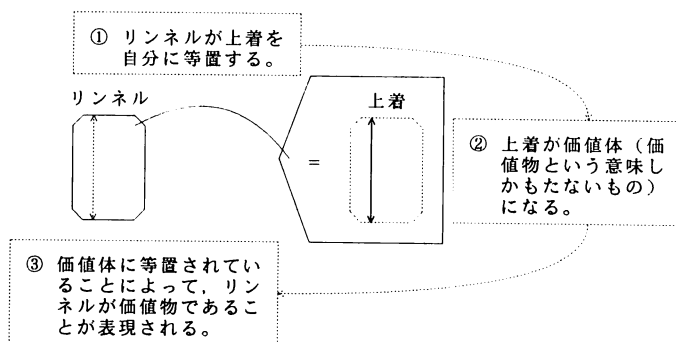
この連関のなかでは、第1に、上着はボタンのついたその物的な姿のままで価値の存在形態の意味をもっている。あるいはむしろ、そのモダンなデザインにもかかわらず、上着はこの関係のなかでは、ある量の価値をもっているもの、すなわち〈価値物〉という意味しかもっていない。というのは、上着がリンネルと等しいのは、そういうものとしてでしかないの

だからである。このように、その身体そのものが或る量の価値という意味しかもっていない商品を〈価値体〉と呼ぶ。つまり、リンネル—＝上着という価値表現によって、—＝→上着 という形態を受け取った上着が、リンネルにとっては価値体となっているのである。他方で第2に、リンネルは、このような価値体としての上着と等しいということによって、自分が価値であることを表現している。こうして、リンネルの価値が、その使用価値——これはリンネルの身体そのもの、その現物形態に現われている——から区別されて表現されている。

このようにして、感覚的につかむことができないリンネルの価値が、感覚的につかむことができる上着の使用価値によって表現されているのであり、リンネルの価値が上着の使用価値という形態で現われている。ここでは、上着はリンネルの価値の現象形態となっているのである。

以上の価値表現のメカニズムで最も肝心なところは、リンネルが自分の価値を自分だけで直接に表現することができないので、ひとまず他商品上着を自分に等置し、それを価値体にしたうえで、この価値体で自分の価値を表現する、という回り道をしていることである。これを〈価値表現の回り道〉という。価値表現のメカニズムの肝要は、まさにこの〈回り道〉にある（第10図）。

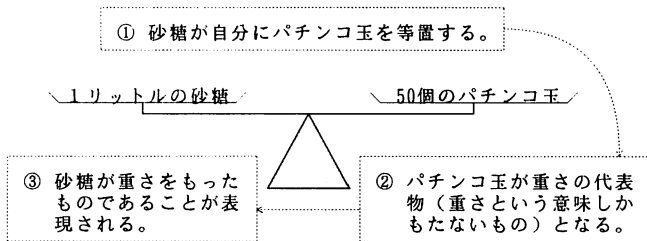
第10図 価値表現の回り道



このような〈回り道〉の筋道だけをとって見れば、じつは、それは価値

表現だけに特有なことではない。たとえば、ある量の砂糖の重量を目に見えるように表現することを考えてみよう。重さはそれ自体としては目で見えることはできない。そこでわれわれは、天秤の一方の皿にこの砂糖を載せる。そして、他方の皿に、それと釣り合う何個かのパチンコ玉を載せる。こうして、たとえば、1 リットルの砂糖 = 50 個のパチンコ玉 という等式ができる (第 11 図)。

第 11 図 重量表現における回り道



ここでは、1 リットルの砂糖に 50 個のパチンコ玉が重さの点で等しいものとして置かれている。言うまでもなく、ここで等しいのは重さだけであって、それ以外の性質はいっさい無視されている。しかも、このなかで砂糖とパチンコ玉とは同じ立場にあるわけではない。ここでは、砂糖にたいして、パチンコ玉の物体そのものが重さの現象形態、存在形態、代表物となっているのである。いうまでもなく、パチンコ玉それ自体はけっして重さそのものではなくて、あくまでも一種の物体である。にもかかわらず、その物体としての何個かのパチンコ玉によって、砂糖の重さが、またその重量が表現されるのである。ここでは、重さがパチンコ玉という姿をとっているばかりでなく、パチンコ玉はここでは重さの代表物という意味しかもっていない。砂糖の量の増減に応じて、パチンコ玉の個数も増減する。もしも、砂糖だけでなく、他の多くの物体が同様にパチンコ玉で自分の重量を表現するならば、それらの物体は互いにその重量を比較しあうことができるであろう。そうなれば、パチンコ玉の物体形態が重さの代

表物の意味しかもっていないことがさらに明らかになるであろう。この例で大事なところは、砂糖がパチンコ玉を自分に重さの点で等置することによってパチンコ玉を重さの代表物に変え、そのうえでこのパチンコ玉で自分の重量を表現している、という〈回り道〉である。この〈回り道〉の筋道に関するかぎり、それと価値表現の〈回り道〉とは完全に同一である。

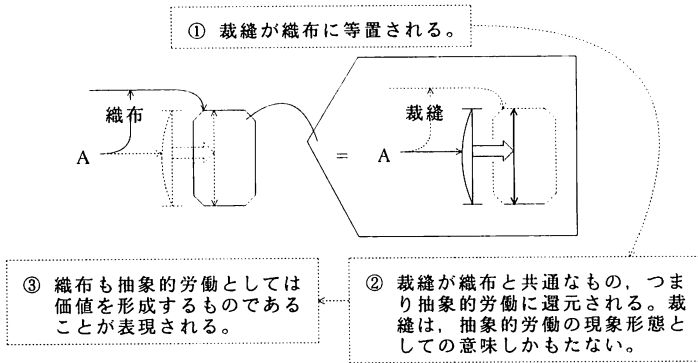
さて、以上のような〈回り道〉によってリンネルは自分の価値を表現するのであるが、この〈回り道〉のなかで、じつはさらに、価値とはなにかということ、つまり価値の本質そのものが表現されることになる。これは、価値表現の回り道に含まれているさらに深い内容、正確に言えばその質的内容である。

リンネルが上着を価値物として自分に等置する。これによって、上着に含まれている労働（裁縫）がリンネルに含まれている労働（織布）に等置される。この等置によって、上着に含まれている労働（裁縫）が、両方の労働に共通なもの、すなわち抽象的労働に還元される。この関係のなかでは、上着をつくる労働（裁縫）は抽象的労働の実現形態、抽象的労働が取っている姿としての意味しかもたないことになる。そして、これによって、リンネルに含まれている労働（織布）も、価値を形成するものであるかぎりは抽象的労働にほかならない、ということが現われてくるのである。

しかも、上着に含まれている労働（裁縫）は、上着という物体形態、対象の形態をとっている——上着に含まれている労働はむしろこの物体形態から見て取られるのである——のであって、これによって、リンネルに含まれている労働も、流動状態にある抽象的労働ではなくて、凝固状態にある抽象的労働であることが表現されている（第12図）。

われわれはすでに交換価値の分析によって、価値が抽象的労働の結晶であることを知っている。しかしこれは、われわれの頭脳のなかで行なわれた抽象の結果であった。ところが、一商品の他商品による価値表現では、価値が抽象的労働の結晶であることが、〈回り道〉のなかで実際に現われ

第12図 価値表現のメカニズムの質的内容



てくるのである。ただし、現われてくると言っても、使用価値を生産する具体的労働と価値を形成する抽象的労働との労働の二重性をすでに明確に知っているわれわれにとってであって、これを知りようもない商品所有者たちにとってでないことは言うまでもない。

ここで〈回り道〉の意味を、いまいちど確認しておこう。

20 エレのリンネル—＝1 着の上着—という価値表現では、リンネルの価値が上着の使用価値で表現されている。しかし、これがそのような価値表現でありうるためには、ここでは上着の物的な身体が価値体として通用しているのでなければならない。つまりそれは、もっぱら価値として、つまり、リンネルの価値に対象化している労働とまったく区別されない労働、人間的労働の凝固体として通用していなければならない。というのも、そうでなければ、上着という使用価値が価値という社会的なものの量を表現することはできないからである。だが、上着が価値体として通用するという状態は、どのようにして成立するのであろうか。それは、リンネルが上着を自分に、質的かつ量的に等置するということによって、言い換えれば、リンネルが上着にたいして、上着は自分と価値が等しいものなのだ、つまり等価物なのだ、と認める様態で関わること、連関することによってである。このことが意味するのは、つまるところ、リンネルは上着にた

いして、上着をそのようなものとして認めるという様態で関わるということである。このことによって始めて、上着は、価値体という、この連関のなかでのみ通用する社会的な質を、さらに厳密に言えば、経済的形態規定性を受け取るのである²⁾。このような〈回り道〉をすることによって始めて、リンネルは、自分自身もまた価値物、つまり価値をもった物である、とすることができるのである。肝心なところは、そもそも商品は、自分だけで自分の価値を表現することがけっしてできず、まずもって他商品の現物形態を自分の価値鏡にしなければならない、ということである。まさにこの点に価値形態の秘密が、したがってまた貨幣の秘密がある。

以上が、二つの商品の交換関係に潜んでいる一商品の単純な価値表現の〈メカニズム〉である。

商品の価値は抽象的労働の結晶であり、したがってまったく社会的なものである。だから商品は自分の価値を直接に自分の身体で表現できない。そこで他の商品を自分に等置して自分の価値の鏡とし、その鏡を媒介にして間接に、自分が価値であることを表現する。こうして始めて、商品の価値は価値形態を受け取り、交換価値として現象するのである。

これによって、「どのようにして、商品は自分の価値を他の商品の使用価値で表現することができるのか」という問題は解決され、価値形態の謎および等価形態の謎はひとまず解かれている。そしてこれによって、貨幣形態の謎および貨幣の謎を解く決定的な鍵が与えられているのである。

- 1) 「様態」という語は奇妙に響くかもしれないが、ある主体がなんらかの行動をするときに、どのような仕方、態度、振舞い方、ありようをするか、いうことを最も一般的に表現する語として選ばれている。抵抗を感じられるのであれば、たんに〈仕方〉と読み替えられて結構である。次注を参照されたい。
- 2) 「リンネルは、それが上着にたいして、上着は自分の等価物であると認める様態で、自分と直ちに交換できるものであると認める様態で連関する、関わることによって、自分の価値を上着で表現しているのだ」というこの文章は、ドイツ語では、次のように言い表わされる。„Indem sich die Leinwand auf den Rock als ihr Äquivalent, als unmittelbar mit sich Austauschbares

bezieht, drückt sie mit dem Rock ihren Wert aus.“ このなかの「連関する」 sich auf B als C beziehen (あるいは「関わる」 sich zu B als C verhalten) という表現は、価値形態論ではきわめて重要な意味をもっている。この表現については、いずれ、別稿(仮題:「価値形態論における連関と関わりについて」)で立ち入って論じてみたいと考えている。

(2) 価値表現の量的規定性

以上、最も単純な価値表現の質的内容を見たので、今度はそれを前提にして、その量的側面を見ておくことにしよう。

20 エレのリンネル $\text{—} [= 1 \text{ 着の上着}]$, すなわち、20 エレのリンネルは1着の上着に値する、という等式は、1着の上着に、20 エレのリンネルに含まれているのと同じ量の価値実体(抽象的労働)が含まれているということ、したがって両方の商品量の社会的必要労働時間が等しいことを前提する¹⁾。しかし、1 エレのリンネルの社会的必要労働時間と1着の上着の社会的必要労働時間とは、それぞれ織布または裁縫という、互いに無関係の具体的労働の生産力の変動につれて変動するのであり、それにとまって1 エレのリンネルの価値と1着の上着の価値とは、互いに無関係に変動する。このような両者の価値変動は、価値の大きさの相対的表現(価値の相対的価値としての表現)にどのように反映するであろうか。

そこで、上の等式を、20 エレのリンネルが自分の価値をなんらかの量の上着で表現している等式に書き直そう。

$$20 \text{ エレのリンネル } \text{—} [= y \text{ 着の上着}]$$

20 エレのリンネルの価値を p , 1着の上着の価値を q とすれば、この等式は、両辺の価値量が等しいということ、すなわち、

$$p = yq$$

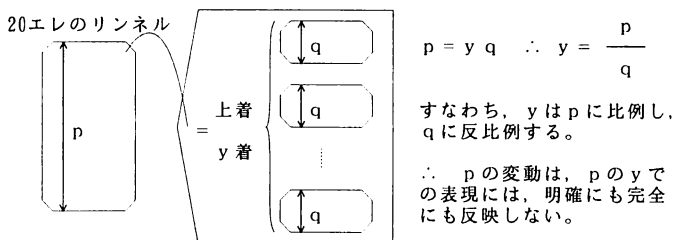
であることを前提にして成立したものである。

そこで問題は、リンネルを生産する織布あるいは上着を生産する裁縫の生産力が変動して、 p または q , あるいはその両者が変化した場合に、 y がどのように変化するか、ということになる。つまり、

$$y = \frac{p}{q}$$

にあって、 p と q との変化が y にどのように反映するか、ということである。明らかに、 y は、 p に比例し、 q に反比例する。 p と q との増減率が等しければ、 y はまったく変化しない。これを相対的価値表現の法則と言うが、これからただちに分かるのは、価値量の変動は価値量の相対的表現または相対的価値の大きさには、明確にも完全にも反映しないということ、したがって相対的価値の変動を見ても価値量そのものの変動はつかめない、ということである。この事実、商品の価値は他商品の使用価値で相対的に表現されるほかはない、ということの必然的な結果であって、のちに見る、価値の変動は価格の変動に直接反映するわけではない、という事実の基礎をなすものとして、重要な意味をもっている（第13図）。

第13図 価値表現の量的側面（相対的価値表現の法則）



- 1) 20 エレのリンネル = 1 着の上着 という価値表現は、リンネルが上着を材料にして行なっている価値表現である。だから、このような価値表現があったとしても、それは、実際に 20 エレのリンネルと 1 着の上着との価値が等しいことを示しているものではない。両商品の価値は実際には不等であることも十分にありうる。けれどもこの価値表現そのものは、20 エレのリンネルが 1 着の上着にたいして、1 着の上着は自己と価値が等しいものだ、として関わる関係、つまり価値関係のなかに含まれているのであって、そのかぎりで、20 エレのリンネルの価値と 1 着の上着の価値とが等しいことを前提にして成立しているのである。両方の価値量が現実には等しいかどうかは、この価値表現そのものにとってはどうでもよいことである。だから、価値表現の量的規定性を問題

にするときには、価値表現の前提となる両者の価値の関係と両者の価値の現実の関係との一致不一致は問題にならない。このような問題は、ここではひとまず、考慮の外に置いておかなければならない。そして一致不一致から生じる問題を除去するためには、むしろ、それらが一致しているものと前提する必要があるのである。

§4 等価形態

(1) 直接的な交換可能性の形態

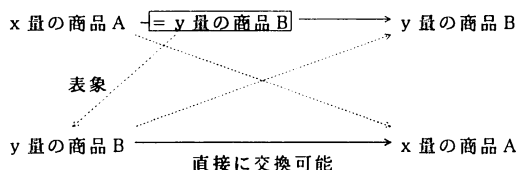
すでに見たように、リンネルは、自分の価値を上着の使用価値で表現すると同時に、上着に等価形態という価値形態を押しつける。リンネルは上着にたいして、上着は価値の点で自分に等しいのだ、とする様態で関わることによって、自分が価値をもっていることを表現し、そしてまた自分の価値の大きさを表現する。この価値表現のなかで上着は等価物として役立つのであり、これによって上着は等価形態をもつことになるのである。すなわち、上着は $-\boxed{=}$ → 上着 という形態を与えられるのである。

ところで、価値としてはどの商品も、抽象的労働という同じ一つのもの物的表現であり、したがって互いに置き換えられることができる、つまり交換可能な物的表現である。しかし商品は、他商品と交換されうるためには、まずもって、それが価値であることを外部からみてとることができるような形態をもたなければならない。20 エレのリンネルは、 $-\boxed{= 1 \text{ 着の}} \boxed{\text{上着}}$ という価値表現をもつことによって、それは他商品と交換されうる形態、つまり商品形態をもつことになる。しかし、リンネルが交換されうるというのは、それがもし他商品によって等価物とされるならば、そのときにはそれと交換されうる、というたんなる可能性であり、商品として交換の場に出てきているということの別表現でしかない。リンネルが、このようなたんなる可能性ではなくて、他の商品と交換しようとすればただちに交換できるという現実的な可能性を、あるいはそのような力をもつためには、つまり直接に交換されうる——すなわち商品所持者が交換しようと

すればすぐに交換できる——ためには、リンネルは、たんに商品として交換の場に出ているというだけではなくて、さらに、その商品体の直接的な形態、つまりそれ自身の物体形態あるいは現物形態そのものが、他商品にたいして価値を表わし、あるいはこの他商品にたいして価値の姿として通用しなければならない¹⁾。

すでにみたように、20 エレのリンネル $\rightarrow \boxed{= 1 \text{ 着の上着}}$ という価値表現があるとき、20 エレのリンネルがもっていないこのような可能性、能力、つまり直接的な交換可能性をもっているのは、この価値表現が表象している上着、すなわち $\rightarrow \boxed{=} \rightarrow \text{上着}$ である²⁾。総じて、ある商品が等価形態をもっているということは、その商品が価値表現のなかで置かれている位置によって、その商品自身の現物形態が他の商品にとっての価値形態として通用しているということ、すなわち、その商品が他の商品との直接的交換可能性の形態をもっているということを意味しているのである。等価形態にある商品、ここでは上着は、その直接的な現物形態のままで、相対的価値形態にある他商品、ここではリンネルと交換可能なのだから、リンネルと交換されることができるようになるために、まえて、ボタンをつけポケットをもったその現物形態とは違ったなにか別の形態を取る必要はない。つまり、一商品（上着）の等価形態、すなわち $\rightarrow \boxed{=} \rightarrow \text{上着}$ は、その商品（上着）の他商品（リンネル）との直接的な交換可能性の形態なのである。ここで〈直接に交換可能だ〉というのは、交換できるかもしれないし、できないかもしれない、という意味でも、交換されるかもしれないし、されないかもしれない、という意味でもない。そうではなく

第 14 図 等価物は直接的交換可能性をもつ



て、交換しようとしさえすればすぐに交換できる、そのような力をもっている、ということなのである³⁾ (第14図)。

- 1) 等価形態が「直接的交換可能性の形態」であること、そしてさらに、相対的価値形態に立つあらゆる商品がもつたんなる「交換可能性」と等価形態がもつ「直接的交換可能性」との区別は、マルクスの価値形態論の理解にとってきわめて重要な意味をもっている。

等価形態が直接的交換可能性の形態であることを——おそらく意識的に——まったく無視することによって成り立っているのが、武田信昭氏の価値形態論(『価値形態と貨幣』, 梓出版社, 1982年)である。氏の価値形態は、諸商品の交換関係とはまったく無関係に成り立ちうるものであって、それは、諸商品の交換関係を前提し、それからつかみだされているマルクスの価値形態とはまったく異なるものである。そのことが、氏の著書では等価形態が「直接的交換可能性の形態」であることについて——おそらく意識的に——完全に口をつむがれるという結果になっているのであろう。

他方、マルクスにあってはたんなる「交換可能性」と「直接的交換可能性」とが厳密に区別されていることにまったく気づかないか、あるいは気づかないふりをしたまま、マルクスの価値形態論についてあれこれ論じているのが、岩井克人氏の議論(『貨幣論』, 筑摩書房, 1993年)である。氏の議論にあっては、氏によるマルクスの「交換可能性」なるものが、マルクスの理論を終局的に否定するのにきわめて重要な媒介環となっているのであるが、氏のマルクス批判がこのような区別さえきまえないものであることを指摘することもできずに「深刻な問題提起」などと騒ぎ立てる論者は、それによって、自分自身がマルクスの価値形態論についてほとんどなににも分かっていないことを吐露することになっている。

- 2) 等価形態をとっている商品、すなわち等価物として役立っている商品は、この価値表現そのもののなかで思い描かれている、あるいは〈正札〉に書かれている、その商品の観念的な像ではない。どれであろうと、現実存在しているその種の商品そのものである。相対的価値形態にある商品がその価値表現によって関わるのは、つねに、交換の対象としての現実存在する商品なのであり、現実存在する商品が等価形態という形態を与えられるのである。そのことは、〈正札〉の観念的な像が〈直接的交換可能性〉をもつ、ということの無意味さを考えてみれば明らかである。直接的交換可能性をもつことができるのは、実在的な商品だけである。〈正札〉に描かれた観念的な像は、実在的な商品を表象することができるだけである。

マルクスは、『経済学批判要綱』のなかで、ステューアトらの観念的価値尺度論を批判しているが、そのさい、バーバリ地方での観念的なバーなる貨幣単位について紹介し、かつそれについての諸々の謬論を批判している。ところが、価値形態論に関する大著のなかで、こともあろうに、これに関するマルクスの記述を論拠にして、等価物が現実存在する商品である必要はなく、商品交換なしにまず価値表現および等価物が成立する、と大真面目に論じている論者がいる。その必然的な帰結が、等価物がもつ直接的交換可能性という本質的な規定性をまったく無視する、ということなのである。

マルクスは、次のように書いている。

「ステューアトの場合、観念的価値基準についてのたわごとは、二つの例によって歴史的に説明されている。……第2の例は、同じ方向に追従するすべての新参者が彼の受け売りをしてきたものである。たとえばアーカートは、バーバリ地方の例を挙げる。そこでは観念的なバー〔棒〕なるもの、棒鉄が、つまりたんに表象されただけの棒鉄なるものが、上昇も下落もしない尺度基準として通用しているのである。……この「観念的な」表象された尺度基準は、表象された現実的価値に他ならない……。バーの基礎には現実の棒鉄があるのだから、その棒鉄がその後、空想的存在に転化させられ、そのようなものとして固定されたのである。／……これらの未開人も、棒鉄のある分量から出発したのだが、この棒鉄が伝統的にもっていた価値を計算単位として固持するのであって、云々。」（『経済学批判要綱』、MEGA, II/1.2, S.662-666, 強調一引用者。）

ここでマルクスが言っているのは、もともと諸物品と棒鉄との交換関係があって、そこからバーという尺度基準が生まれたのだということである。交換関係にもはまらないものが「現実的価値」をもつはずもなく、〈正札〉のうえに思い描かれることもありえない。

たとえば、国民所得を貨幣で表現するときに役立っている貨幣は、まったく観念的な貨幣であり、この表現それ自体がまったく観念的なものであるが、しかし、そこに思い描かれている貨幣は実在的な貨幣なのであり、貨幣はこの価値表現の外部に厳然として実在しているのである。ただし、貨幣の場合には、この価値表現が行なわれる以前に、すでに金が貨幣となっているのであって、この表現が金を貨幣にするのではないのではあるが。

- 3) 交換しようとするばすぐできる、というとき、実際に交換しようとし、そして交換するのは、商品そのものではなくて、商品所持者である。等価物の所持者が相対的価値形態にある商品にたいする欲求をもつならば、彼はその等価物がもつ直接的交換可能性を実現して、その代わりに相対的価値形態にある商品

を手に入れるのである。しかしこのことは、等価物商品そのものの与り知らぬところである。等価物そのものがもつのは直接的交換可能性でしかない。

単純な価値形態を含む、二つの商品の交換関係では、どちらの商品も他方の商品の所有者の欲求の対象である。だから、20 エレのリンネルになぜ——他の商品種類ではなくて——上着が等置されたのか、と言え、それはリンネルの所有者が上着を欲したからである。しかし、この交換関係から、そのなかに含まれている上着でのリンネルの価値表現を取り出してみれば、そのなかでは、上着は価値体でしかない。上着の物体形態は価値物としての意味しかもたないのであって、欲求の対象としての意味をまったくもっていない。リンネルは物象であって、欲求はもたないからである。そして、価値形態論で問題になるのは、こうした物象としての諸商品のあいだの関係であって、商品所持者の欲求は、価値表現を含む交換関係成立の要因として前提されているだけである。

(2) 等価形態は、等価物商品の価値の量的規定を含んでいない

一商品の等価形態、つまり他商品との直接的な交換可能性の形態は、価値表現のなかのその位置によって与えられるまったく質的な規定、形態規定である。ところが、このまったく質的な規定を見誤って、ここに量的な関係だけを、しかもこの商品の価値量を見る、誤った見解が見受けられる。けれども、一商品の等価形態は、この商品自身の価値の量的規定をまったく含んでいないのである。

1) たしかに、等価形態にある商品（上着）は、2 着等々ではなくて1 着、というように、量的にきまった大きさではある。しかしこの大きさは、使用価値の量であって、この量はリンネルと上着との価値量の比率によってきまらることで、リンネルと直接に交換可能だという上着の特徴的な属性とはまったくかわりがない。上着の2 着か1 着かということとは、むしろ、リンネルの側での価値表現の量的規定性、つまり相対的価値の量的規定性なのである。

2) たしかに、20 エレのリンネルがある一定の量の価値として1 着の上着で表現されている場合、この表現が20 エレのリンネルと1 着の上着

との交換関係から抽象されたものであるかぎり、それは他方に、1着の上着 $- = 20 \text{ エレのリンネル}$ という逆の連関、価値表現を想定するものである。そしてこの価値表現では、上着の価値の大きさがリンネルによって表現され、量的に測られている。しかし、1着の上着 $- = 20 \text{ エレのリンネル}$ という等式では、上着はすでに等価形態ではなく、相対的価値形態にあって、自分の価値を20エレのリンネルで相対的価値として表現しているのである。上着が価値表現で等価物の位置に置かれるときには、上着は、価値の大きさとしてのどんな表現をも受け取らない。等価物の位置にある商品種類は、価値等式のなかでは、使用価値の、物の一定量としてだけ意味をもつのである。

3) たしかに、 $20 \text{ エレのリンネル} = 1 \text{ 着の上着}$ という、等号で結ばれた等式は、20エレのリンネルと1着の上着とが等しい大きさの価値であること、「等価」であることを前提にして成立しているものだと言える。けれども、この場合の「等価」という言葉は、われわれが頭のなかで両者を価値という抽象物に還元したうえで、それらが量的に等しいということを行っているにすぎないのであって、リンネルの価値表現のなかで上着もっている「等価物」という形態規定とは別の事柄である。両者は、はっきりと区別しなければならない¹⁾。

- 1) 筆者は、20エレのリンネルが自己に1着の上着を等置している等式を、20エレのリンネル $- = 1 \text{ 着の上着}$ のように、左辺と右辺とが異なった位置にあるものであることを明示する仕方を書き表わしている。マルクスはこれを、 $20 \text{ エレのリンネル} = 1 \text{ 着の上着}$ のように、左辺と右辺とをただ等号で等置しただけの等式で表わしている。しかし、マルクスの場合にも、価値形態論でのこの等式における左辺と右辺とは、筆者が明示的に示しているようなはっきりした区別があるのである。ところが、『資本論』の冒頭での、商品の交換価値から価値を析出する分析のなかでは、同じかたちの等式、1クォーターの小麦 $= a \text{ ツェントナーの鉄}$ という等式は、この二つの商品を分析者が頭脳のなかで等置していることを表わすものとなっている（この点については、別稿「商品および商品生産」の【補論1】「使用価値の捨象によって抽象的労働に到達

するのは無理であるか」を参照されたい)。価値形態論のなかでさえ、等式がこのような意味で使われている場合がある。同じかたちの等式が、このように別の意味をもたされているために混同や誤解が生じやすい。マルクスの文章は、このかたちの等式がどちらの意味のものであるかをしっかりと区別しながら読む必要があるのである。

(3) 等価形態の独自性

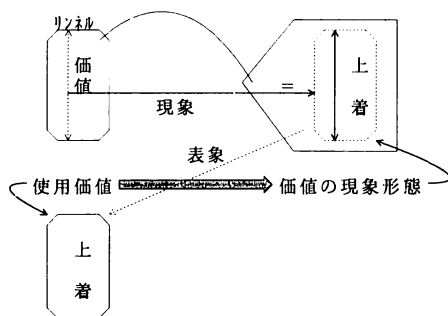
価値表現のなかで等価形態に置かれた商品が果たす役割、すなわち、価値表現の材料として機能し、直接的な交換可能性をもつという役割はすでに明らかとなっているが、この等価形態にはさらに、価値の本質についての認識をもって、つまり価値概念をもって、これを観察したときにはじめて見えてくる、重層的に関連する三つの独自性がある。これは、商品生産における生産関係の物象化¹⁾を理解するためにきわめて重要な意味をもっているので、立ち入って見ておかなければならない。

1) 等価形態の第1の独自性は、使用価値がその対立物である価値の現象形態となる、ということである。

商品の現物形態がそのまま価値形態になるのである。しかし、注意しなければならないのは、このような〈入れ替わり〔Quidproquo〕²⁾が商品B（たとえば上着）にとって生じるのは、ただ、他商品A（たとえばリンネル）が商品B（上着）で自分の価値を表現しているという関係のなかでだけのことだ、という点である。たとえば上着は、この関係から切り離してそれ自体として観察すれば、リンネルとまったく同様に、一つの特珠的な有用物、使用価値であり、ポケットやボタンのついた現物形態しかもっていない。ところが、この使用価値が、リンネルとの価値関係の内部では、そのまま価値の現象形態となるのである（第15図）。

相対的価値形態と対比してみると、等価形態のこの独自性がよくわかる。たとえばリンネルの相対的価値形態を取ってみよう。ここでは、リンネルの価値性格はリンネルの現物形態やその自然属性とはまったく違うものであることが、他商品、たとえば上着での相対的価値表現に、はっきり

第15図 使用価値が価値の現象形態となる



と現われている。つまり、この表現そのものが、ある社会的な関係（他商品への関係）を自分のなかに包みこんでいることを示唆している。

ところが、等価形態の場合にはそうではない。等価形態、つまり $\boxed{=}$ → 上着 は、上着という商品体が、こうした〈物〉そのものが、そのまま価値を表現し、したがってその生まれながらの姿のままで価値形態をもつということ、まさにこのことによって成り立っているのである。

もちろん、これは、いまも述べたように、リンネルが等価物としての上着に関係している価値関係のなかだけで通用することである。ところが、普通には、ある〈物〉の諸属性は、その〈物〉が他の〈物〉にたいして関係をもつことから生まれるのではなくて、もともとそれがもっていた属性が、そうした関係のなかで実証されるにすぎないので、そこで上着もまた、その等価形態を、つまり直接的な交換可能性というその属性を——これは、上着が他商品にとっての等価という位置に置かれることによって初めて生じたものであるにもかかわらず——、まるで重さがあるとか保温に役立つとかいう自然属性と同じように、生まれながらにもっているかのようにみえることになるのである。つまり、上着は、リンネルが上着を自分に等置していないところでも、もともと生まれながらにリンネルにたいする等価物であったかのようにみえる、ということである。

単純な価値形態について見ているかぎり、これが錯覚であることを見抜くのはまだそんなに困難なことではない。けれども、これがのちに、貨幣において完成した姿で現われると、人々は、また経済学者たちでさえも、すっかり目をくらまされてしまう。金は、そのもろもろの自然属性とともに、すなわちその光り輝く色、その比重、等々とともに、その等価形態をも、つまり他のすべての商品と直接に交換されうるという社会的な性質をも、生まれながらにもっているようにみえる。そこで経済学者たちは、なんとかして金や銀の神秘的な性格を説明しようとして、金銀以前に商品の等価物であったことのあるすべての商品を列挙し、これらに金銀のまぶしい輝きを対置すれば、それで説明できたかのように考える。彼らは、20 エレのリンネル－＝1 着の上着というような、最も単純な価値表現が等価形態の謎を解かせるものなのだ、ということにはまったく気づかないのである。

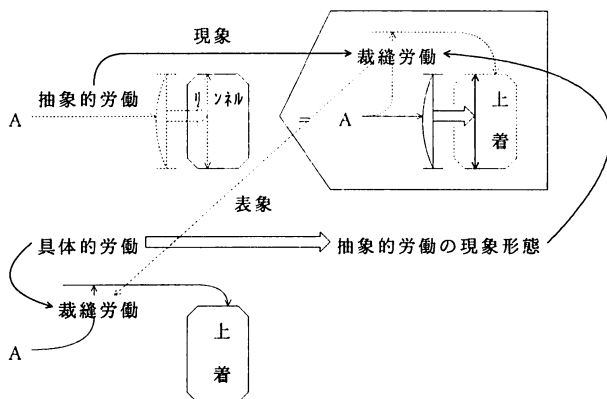
ここに、等価形態となっている商品の謎めいた性格の源泉がある。われわれはさきに、「使用価値としての金、物である金が、本来その対立物である価値として通用することの謎」を貨幣の謎と呼んだが、貨幣の謎は、じつは、等価形態の謎の発展したものにはほかならない。だからこそ、貨幣形態の謎を解く鍵は、最も単純な価値表現、たとえば 20 エレのリンネル－＝1 着の上着のなかにあるのである。じっさいわれわれは、単純な価値表現のメカニズムを解明して、商品の使用価値がいかにして商品の価値を表現するのかを明らかにし、そこで等価の機能を果たす商品が受け取る独自の性格を追究することによって、等価形態の謎めいた性格の生まれてくるゆえんを明らかにしたのであった。

- 2) 等価形態の第2の独自性は、具体的有用的労働が、その対立物である抽象的人間的労働の現象形態となる、ということである。

等価物として役立つ商品の身体は、つねに抽象的労働の体化物として意義をもつが、そうでありながら、しかもつねにそれは、ある一定の具体的労働の生産物である。というよりむしろ、それが一定の具体的労働の生産

物であることによって、はじめて特定の物としての身体をもつのであり、価値体として通用することができる。つまりここでは、具体的労働が抽象的労働の表現となるのである。たとえば上着が抽象的労働のかたまりとして通用するときには、上着として現われる裁縫労働は、もっぱら抽象的労働の現実化した形態として通用するわけである（第16図）。

第16図 具体的労働が抽象的労働の現象形態となる



ところで、裁縫労働の形態でも織布労働の形態でも、人間労働力が支出されるのであり、どちらも人間的労働という一般的属性をもっているのであって、商品进行分析してその価値の生産を問題にするときには、このような見地だけから考察するのである。ここには神秘的なことはなにもない。

ところが、商品の価値表現では、事柄そのものがややこしいことになる。たとえば、〈織布労働がリンネル価値を形成するのは、織布労働としての具体的形態においてではなくて、人間的労働というその一般的属性においてなのだ〉ということ——商品の価値関係そのものによって——表現するために、織布労働にたいして、裁縫労働という具体的労働が、抽象的労働の手でつかめる実現形態として対置されるのである。ここでは、抽象的一般的なもの、具体的なもの、感覚的に現実的なものの属性として

認められる——これならよく分かる——のではなくて、逆に、感覚的具体的なものが、抽象的一般的なものとなる現象形態または特定の実現形態として認められるのであり、このような不可避的な〈入れ替わり〉によって、価値表現は不可解なもの、謎めいたものとなるのである。

- 3) 等価形態の第3の独自性は、私的労働が、その対立物の形態である直接に社会的な形態にある労働になる、ということである。

労働生産物は、それらが互いに独立して営まれる私的労働の生産物でないならば、商品とはならない。互いに独立して営まれる私的労働が社会的関連のなかにあると言えるのは、それらがいずれも自然生的な社会的分業の分枝をなしており、したがってまた、それらの生産物が、社会的欲求の自然生的なシステムの各部分をなしているもろもろの欲求を充たすかぎりにおいてである。しかし、互いに無関係に営まれるもろもろの私的労働のこのような社会的関連が媒介され、実現されるのは、生産物の交換によってである³⁾。だから、私的労働が社会的形態をもつには、なによりもまず、その生産物が商品の形態を、だから価値形態をもたなければならない。しかし、商品が相対的価値形態をもっていたとしても、その交換可能性はまだたんなる可能性でしかない。

それが直接に社会的な形態をもつのは、それ自身の物体形態、現物形態が同時に、他商品との直接的な交換可能性の形態となっており、言い換えれば、他商品にたいして直接に価値形態として通用する場合だけである。そして、労働生産物がそうした形態を受け取るのは、他商品との価値関係のなかでそれが等価形態に置かれ、他商品にたいして等価物の役割を演じる場合だけである。

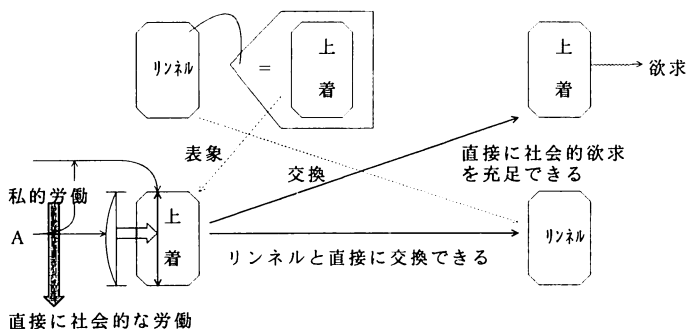
リンネルを生産する具体的有用的労働である織布労働も上着を生産する具体的有用的労働である裁縫労働も、どちらも直接には私的労働である。にもかかわらず、この二つの具体的有用的労働のあいだには、決定的な違いがある。

リンネルを生産する織布労働は、リンネルが上着と交換されないかぎ

り、私的労働にとどまり、社会的労働になることはできない。そしてこの交換は、上着の側にかかることであって、リンネルが自由にできることではない。つまり、リンネルを生産する織布労働は、これから社会的労働にならなければならないのであって、直接には社会的労働ではないのである。

これにたいして、上着の方は、直ちにリンネルと交換できる立場にある。したがって、上着を生産する裁縫労働は、だれかの欲求を満たす有用的労働になりうることが保証されている。それは直接に社会的な労働となっているのである（第17図）。

第17図 私的労働が直接に社会的な労働になる



このことは、金が貨幣になったときのことを考えてみるとよくわかる。金以外のあらゆる商品を生産する具体的労働は、直接には私的労働にすぎないのであって、それが生産する商品が貨幣によって買われなにかぎり、社会的労働になることができない。ところが、金を生産する具体的労働である産金労働は、直接に社会的な労働である。なぜなら、それが生産する金は、それ自体として価値のかたまりとして通用するのであり、いかなる商品とでも、直ちに、無条件に交換できるのであって、それを生産する産金労働が私的労働のままに終わる心配はまったくないのである。

ところで、等価物が直接に社会的な形態をもっているのは、それが他商品との直接的交換可能性の形態をもっているからであるが、それがこのよ

うな直接的交換可能性をもっているのは、それが他商品にたいして価値体として、したがってまたそれらと同等なものとして、通用するかぎりでのことである。たとえば裁縫労働というような一定の労働が、たとえばリンネルというような異種の商品に含まれている異種の労働——織布労働——との同等性の形態をもつことができるのは、ただ、裁縫労働というこの特定の形態が、異種の労働のあいだの同等性を現実形成しているものの表現として意義をもつかぎりにおいてのことである。そして、異種の諸労働が同等であるのは、ただ、それらが抽象的労働であるかぎりにおいてである。

したがって、たとえば裁縫労働という、等価物に含まれている特定の具体的労働は、それが他商品に含まれている労働と同じ抽象的労働の実現形態または現象形態として通用することによって、他の労働との同等性の形態をとるのであり、だからこそまた、諸商品を生産する他のあらゆる労働と同様に私的労働であるにもかかわらず、しかもなお直接に社会的な形態をとる労働なのである。だから、この労働は他商品と直接に交換可能な生産物となって現われるのである。

- 1) この点については、別稿「商品および商品生産」、第3節§2「人格の物象化と物神崇拜」を参照されたい。別稿では、以下に見る等価形態の独自性を価値形態論で説明しないまま、物神崇拜について述べざるをえなかったが、物神崇拜は、この独自性を知ったうえで考えることによって、よりよく理解できるものである。
- 2) マルクスが使っているこの〈入れ替わり〔Quidproquo〕〉という表現は、あるものとあるものが、入れ替わって現われることであって、それによって人びとが欺かれることになる。たとえば、モーツァルトのオペラ『フィガロの結婚』で、アルマヴィーヴァ伯爵を懲らしめるために伯爵夫人とスザンナとが衣裳を取り替えて別人になります。そしてこれに伯爵がまんまとひっかかる。これが〈入れ替わり〉である。『女はみんなこうしたもの〔Così fan tutte〕』のフィオルディリージとドラベッラもそうである。Quidproquo は、オペラではときに現われて愉快な舞台回しをするのであるが、商品生産ではでずっぱりで登場人物たちを惑わし続けるのである。

- 3) この点については、別稿「商品および商品生産」、第3節 §1「商品生産関係——私的諸労働の物象的依存関係——」を参照されたい。

§5 単純な価値形態の総体

- (1) 一商品の単純な価値形態は、その商品に含まれている使用価値と価値との対立の単純な現象形態である

商品 B にたいする価値関係に含まれている商品 A の価値表現を立ち入って考察することによって、この価値表現の内部では、商品 A の現物形態は使用価値の姿としてだけ意義をもち、商品 B の現物形態は価値形態または価値の姿としてのみ意義をもつ、ということがわかった。

商品は、使用価値であるとともに価値であって、この価値が、商品の現物形態とは違った独特な現象形態、すなわち交換価値という自立的な現象形態をもつとき、商品は、そのあるがままに、このような二重物——使用価値および価値——として現われるのである。

こうして、一商品のうちに包みこまれている使用価値と価値との内的な対立は、一つの外的な対立によって、すなわち、二つの商品の関係によって表わされることになる。この関係のなかでは、使用価値と価値という二つの対立的な規定が、二つの商品のあいだに対極的に分配されているのである。

もしわれわれが、「商品としてはリンネルは使用価値でありかつ価値である」、と言うなら、それは、商品を分析することによって得た、分析者としてのわれわれの判断である。これに反して、20 エレのリンネル—＝1 着の上着—、すなわち 20 エレのリンネルは1 着の上着に値する、という表現においては、リンネルが自分で、自分は1) 使用価値（リンネル）であり、2) それから区別された価値（上着と同等なもの）であり、3) これらの二つの区別の統一、すなわち商品である、ということを語っているのである。

(2) 商品の単純な価値形態は、労働生産物の単純な商品形態である

労働生産物は、どんな社会状態にあっても使用対象ではあるが、これが商品に転化するのには、歴史的に規定されたある発展段階、すなわち、ある使用物の生産に支出された労働をこの使用物の「対象的」な属性として、すなわちその使用物の価値として表わすような発展段階だけである。労働生産物は使用価値の形態を、その現物形態のうちにもって生まれてくる。だから、労働生産物が商品形態をもつためには、すなわちそれが使用価値および価値という対立物の統一として現われるためには、それはただ価値形態＝交換価値をもてばいいのである。

だから、商品の単純な価値形態は同時に労働生産物の単純な商品形態であり、したがってまた、価値形態の発展は同時に商品形態の発展なのである。

第3節 価値形態の展開

——単純な価値形態から貨幣形態へ——

§1 価値表現のメカニズムの分析から価値形態の展開へ

§2では、単純な価値形態を分析して、価値形態の秘密の根本を追求した。それによって、価値の現象形態がどのようなものであるのか、ということが明らかとなり、〈価値形態の謎〉および〈等価物の謎〉がひとまず解かれた。言い換えれば価値という本質とそれの現象形態との矛盾が、価値の本質にもとづいてひとまず説明された。〈価値形態の謎〉および〈等価物の謎〉は、それぞれ〈貨幣形態の謎〉および〈貨幣の謎〉を最も単純な形態に還元したものであるから、これまでの分析によってわれわれは〈貨幣形態の謎〉および〈貨幣の謎〉を解くことの最大の難所を乗り越えたと言えることができる。

だが、それにもかかわらず、〈貨幣形態の謎〉および〈貨幣の謎〉はまだ完全に解かれたわけではない。なぜなら、われわれのこれまでの分析の

なかでは、貨幣形態と貨幣について分かっているのは、それらが最も発展した価値形態としてわれわれの目の前にあるのだ、ということだけなのだからである。

ところで、x エレのリンネル $\rightarrow$ $\boxed{= y \text{ 着の上着}}$ (x エレのリンネルは y 着の上着に値する) という形態のかわりに、x エレのリンネル $\rightarrow$ $\boxed{= \text{金 } yg \text{ (z 円)}}$ (x エレのリンネルは金 yg (z 円) に値する) という貨幣形態 (価格形態) を置いてみれば、一見して、貨幣形態は商品の単純な価値形態の、それゆえ労働生産物の単純な商品形態のいっそう発展した姿以外のなにものでもない、ということがわかる。貨幣形態は発展した商品形態にほかならないから、それは明らかに、単純な価値形態に源をもっているのである。

したがって、単純な価値形態が把握されてしまえば、残る問題は、単純な商品形態が貨幣形態にまで発展していくあいだに通過する一連の変態を追究することだけである。これによって、〈貨幣形態の謎〉および〈貨幣の謎〉は最終的に解消することになるであろう。

そこでわれわれはこれから、単純な価値形態が貨幣形態にまで発展する過程を展開しなければならない。先取りして言えば、この展開は次の順序で行なわれる。

- A 単純な価値形態
- B 開展された価値形態
- C 一般的な価値形態
- D 貨幣形態

§ 2 価値形態の論理的展開と価値形態の歴史的発展

ところで、価値形態をその最も単純なものから最も発展したものにまで展開する過程、つまり、いま挙げた $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ という展開過程は、価値形態の歴史的発展とはどのような関連をもつのであろうか。それは、歴史的発展をたんになぞるだけのものなのであろうか。それとも、歴

史的発展とはまったくなんの関係ももたない論理的展開であって、歴史的発展と一致するとしても、それはまったく偶然でしかないであろうか。当然に生じるであろうこの問題に、簡単に答えておこう。

そのさい、いま述べた四つの形態のあいだの移行のうち、 $A \rightarrow B \rightarrow C$ の移行と $C \rightarrow D$ の移行とを区別しなければならない。

(1) $A \rightarrow B \rightarrow C$ の移行

なによりもまず、 $A \rightarrow B \rightarrow C$ の移行はけっして歴史的発展の過程を追ったものではなく、純粹に論理的なものだ，ということを確言しておかなければならない。われわれがこれまで単純な価値形態を取り上げて分析してきたのも、それが歴史上最初に存在した価値形態だからというのではなかった。それは、本論でのわれわれの分析に現われている商品がもつことのできる最も単純な交換関係からつかみだされたものだったのである。この単純な価値形態(A)から一般的価値形態(C)までの展開も、それぞれの形態そのものに即してまったく論理的に行なわれることになる。

けれども、このことは、ここでの展開が歴史的発展の過程とまったく無関係であることを意味するわけではない。

なぜなら、すでに述べたように、われわれは価値形態をつねに商品の交換関係のなかからつかみださなければならないのであり、しかも、これから行なう価値形態の展開に登場する諸形態が潜んでいる交換関係そのものが、次第に発展したものとなっていくのであって、それらの交換関係の発展の順序は、歴史的な交換関係の発展と基本的には一致しないわけにはいかないのだからである。だから、価値形態の論理的展開の順序と価値形態の歴史的発展の順序とは、基本的には一致するものと言わなければならない。

それぞれの形態が次の形態に発展していく過程は、価値の本性ないし価値概念とそれぞれの形態そのものだけによって、論理的に説明されなければならない。それはけっして歴史的な過程のあとづけではない。だが、

それにもかかわらず、それぞれの形態は、すべて現実の歴史的過程のなかに見られたものであり、このなかに例証を見いだすことができるのである。そればかりではない。むしろ、それぞれの形態に対応する、交換関係の歴史的発展段階を表象に思い浮べることによって、交換関係と価値形態との関連を理解することが容易になるのである。

それでは、 $A \rightarrow B \rightarrow C$ の移行は、どのような必然性によって行なわれるのであろうか。それは次の二つのことによる。第1に、価値形態は価値の本性の現象形態であり、価値の本性を表現すべきものであるから、それぞれの形態がもし価値を表現するものとして不十分であれば、言い換えればそれぞれの形態が価値概念と不一致であれば、より完全な形態に発展していけないではない。ここに、不完全な形態を脱却しないではない必然性がある。そこで、より完全な形態に発展しているのであるが、第2に、この新たな形態は、じつは、脱ぎ捨てられるそれぞれの形態そのもののなかに潜在的に含まれているものである。およそ事物の発展は、自己を否定しながら、しかもなんらかのかたちで自己のなかに含まれているものに移行していく、という様態で行なわれるほかはない。自己のなかに片鱗も含まれていないような他者に一挙に変身するなどということは、現実の世界では生じようがないのである。この二つのことによって、AはBに移行し、BはCに移行する。

ただ、ここで注意が必要であるのは、ここで「必然性」というのは、商品生産のなかで、Aという形態そのものが必然的にBという形態を生み出し、Bという形態そのものがCという形態を生み出す、ということではけっしてない、ということである。Aという形態がBという形態に発展するのは、商品交換の拡大の結果であって、Aという形態があれば、それが自動的にBという形態を生み出すということではない。Bという形態がCという形態に発展するのは、商品生産の矛盾による商品所持者たちの行動の結果であって、Bという形態があればそれが自動的にCという形態を生み出すわけではない。ここで「必然性」というのは、Aと

いう形態が移行していくのは B という形態であるほかはなく、B という形態が移行していくのは C という形態であるほかはない、という必然性、つまり〈形態発展の必然性〉である。 $A \rightarrow B \rightarrow C$ の移行の「必然性」とは、このような意味での必然性である。

(2) $C \rightarrow D$ の移行

これにたいして、一般的価値形態 (C) から貨幣形態 (D) への移行は、価値形態そのものだけから見れば、これまでの $A \rightarrow B \rightarrow C$ の移行とは大きく性格を異にしている。第 1 に、貨幣形態は、一般的等価物が特定の商品に癒着しているという点で一般的価値形態と異なるだけであって、すべての商品が共同で一つの商品を排除して一般的等価物にしているというかぎりでは、一般的等価形態となんら異なるものではないのであって、諸商品が自己の価値を表現する形態そのものとして見れば、つまり価値表現の形態として見れば、この移行は新たな形態への発展ではない。したがって、第 2 に、この移行は、価値形態と価値概念との不一致による移行の論理的必然性によるものではなく、また一般的価値形態に即自的に貨幣形態が含まれているわけでもない。だからこの移行は、論理的に必然的なものはない。そうではなくて、別稿「商品および商品生産」の【補論 4】「交換過程と貨幣発生 of 必然性」で説明したように、この移行は商品の全面的交換の歴史的発展の結果であって、このことは商品の交換過程について論じるところではじめて説明することができる事柄である。そして、交換過程については価値形態および商品の物神的性格について論じたあとではじめて論じることができるのであるから、価値形態論ですでに $C \rightarrow D$ の移行が示されてはいるが、それはまだその移行の原因を知らないままに、形態 C が形態 D に移行する事実を述べただけであって、われわれはいわば理論的な展開における借りをもつことになる。交換過程について論じるところで、はじめて、商品交換の全面化が進展するのについて $C \rightarrow D$ の移行が必然的に生じることが明らかにされるのであり、ここで借りは返

されることになるのである。第3に、貨幣形態では等価形態が金に癒着しており、金が貨幣なのであるが、それが金であってほかの商品ではないのは、金の自然的な諸属性が等価物の機能に最も適合的であるからである。だからこれは、けっして価値形態の問題ではないのであって、価値形態論で論じられることができるものではなく、交換過程のところではじめて言及されることができる事柄である。

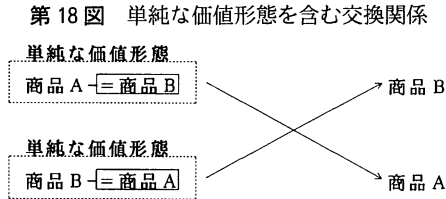
それでは、なぜ、このように、論理的な必然性によって展開される $A \rightarrow B \rightarrow C$ だけでなく、その必然性がのちにはじめて明らかにされ、しかも歴史的過程に即している $C \rightarrow D$ の移行が、価値形態論のここで示されるのであろうか¹⁾。それは、 $C \rightarrow D$ の移行も、それまでの論理的な移行とは性格を異にするとは言え、たしかに価値形態の移行として独自の意味をもっているというばかりでなく、なによりも、最後の貨幣形態 (D)こそが価値形態の完成した形態であって、ここまで展開を進めることによって、最初に立てられた〈貨幣形態の謎〉および〈貨幣の謎〉を示す貨幣形態および貨幣に到達することになるのであり、かくしてそれらの謎が最終的に解明されることになるのだからである²⁾。

- 1) 『資本論』初版の本文では、 $A \rightarrow B \rightarrow C$ のあとに独特の「形態Ⅳ」が置かれており、価値形態の展開は「貨幣形態」にまで進んでいなかった。初版の付録で、 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ の展開が現われ、これが第2版以降の本文で引き継がれている。「形態Ⅳ」については、後出の注のなかで触れる。
- 2) エンゲルスあての1867年6月27日づけの手紙で、マルクスはエンゲルスに、初版付録における価値形態についての叙述の内容を知らせたが、「貨幣形態」のところには、「貨幣形態についてのこの項〔dies〕は、ただ関連上〔des Zusammenhangs wegen〕のものにすぎない。もしかすると半ページにもならないだろう」、と書いている (MEW, Bd.31, S.316)。「関連上」と言っているのは、ここで述べたようなことであろうと考えられる。

8.3 単純な価値形態を潜ませている交換関係

最も単純な価値形態は最も単純な価値関係のなかにあり、最も単純な価

値関係は最も単純な交換関係のなかに潜んでいる。最も単純な交換関係は、ただ二つの商品のあいだの交換関係である（第 18 図）。



この交換関係は、交換される二つの商品の双方の側からの価値表現を含んでいるが、そのどちらも同じ形態、すなわち単純な価値形態である¹⁾。

- 1) 単純な価値形態が二つの商品の価値関係から取りだされたものであることについては、第 2 節の § 1 の注 1 に掲げた引用を参照されたい。

A 単純な価値形態

(1) 形態そのもの

単純な価値形態については、すでに詳論した。その形態だけをいまいちど掲げれば、次のとおりである（第 19 図）。

第 19 図 単純な価値形態

$$x \text{ エレのリンネル} = y \text{ 着の上着}$$

(2) 単純な相対的価値形態と単独の等価形態との欠陥

単純な価値形態はなぜ、この形態のままに留まることができず、さらに発展した形態に移行せざるをえないのか。それは、単純な価値形態は、価値を表現する形態として不十分なものだからである。だからそれは、価値を表現するのによりふさわしい形態、言い換えれば価値の概念により適合した形態に移行せざるをえない。

それでは、単純な価値形態には、価値を表現するのにどのような不十分

さがあったのであろうか。単純な価値形態をふりかえてみれば、それは一見して明らかである。

リンネルは、上着で自己の価値を表現することによって、一つの価値形態をもつことになるが、この形態では、リンネルは価値として、使用価値としての自分自身だけから区別されるにすぎない。20 エレのリンネル— $\boxed{= 1 \text{ 着の上着}}$ では、リンネル価値が上着に等しいものとして、また別の価値表現、たとえば、10g の茶— $\boxed{= 1/2 \text{ トンの鉄}}$ では、茶価値が鉄に等しいものとして表現されているが、しかし〈上着に等しいもの〉と〈鉄に等しいもの〉とは、だからまたリンネルの価値表現と茶の価値表現とは、上着と鉄とが違っているように違っている。しかし、価値は、商品世界のすべての商品の使用価値から区別されるものであるから、それはそのようなものとして表現されなければならない。また、単純な価値形態はリンネルを、上着というある単独な商品種類との価値関係に置くだけである。しかしリンネルは、価値としては、他のすべての商品と同じものである。だからリンネルの価値形態も、リンネルを他のすべての商品にたいする質的な同等性および量的な比率性の関係に置くような形態でなければならない。

一商品の単純な相対的価値形態には他の一商品の単独な等価形態が対応する。言い換えれば、価値の表現に役立つ商品は、ここではただ、単独な等価物として機能するだけである。だから、等価商品上着は、リンネルの相対的な価値表現のなかでは、ただ、リンネルというこの単独な商品種類にたいして等価形態、直接的な交換可能性の形態をもつにすぎないのである。

(3) 単純な価値形態から開展された価値形態への移行

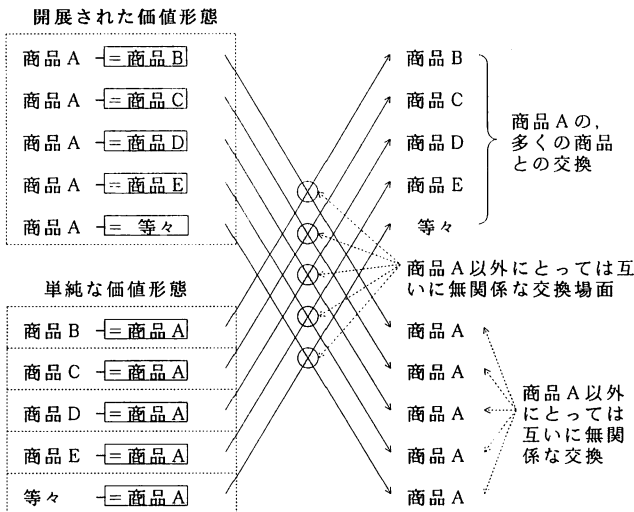
単純な価値形態は、交換関係の拡大とともに、より完全な形態に移行する。この新たな形態は、単純な価値形態と無関係なものでないどころか、むしろ単純な価値形態のうちに潜在的に含まれているものである。

単純な価値形態によっては、一商品 A の価値は、ただ一つの異種の商品 B で表現されるだけである。しかし、この第 2 の商品 B がどんな種類のものであるか、上着であるか鉄であるか米であるか、ということは、この単純な価値形態自身にとってはまったくどうでもよいことである。したがって、商品 A があれこれの商品種類と交換関係または価値関係を結ぶのに応じて、この同じ一つの商品のさまざまな単純な価値表現が生じる。商品 A がもつことのできる価値表現の数は、商品 A 以外の商品種類の数によって制限されているだけである。それゆえ、商品 A の単独な価値表現は、商品 A のさまざまな単純な価値表現のいくらかでも延長されることができる列に転化するのである。

じっさい、商品 A がさまざまな他商品と取り結ぶ交換関係のなかには、商品 A の、ただ単独な他商品による価値表現がみられるのではなくて、もろもろの単純な価値表現の総和がみられるのである。

そこで、そのような、商品 A がさまざまな他商品と取り結ぶ交換関係を見てみよう（第 20 図）。

第 20 図 開展された価値形態を含む交換関係



ここで注目してほしいのは、商品 A の側には、新しい価値形態があるが、商品 B, C, D, 等々の側にあるのは、すでに見た単純な価値形態でしかない、ということである。

もちろん、商品 A が多くの他商品と交換関係を取り結び、したがって自己の価値を多くの他商品で表現する価値表現があるとき、それらの他商品のほうもまた、それはそれで同様に、自己以外の多くの他商品と交換関係をもち、自己の価値を他の多くの商品で表現していること、すなわち同じく、開展された価値形態をとっていることがあるかもしれない。

けれども、商品 A の開展された価値形態それ自体にあっては、商品 A は、他の諸商品のなんの協力もなしに、ただ自分のほうから他の商品に関わっているのであって、他の商品が同様に開展された価値形態をもっていることを必要とするものではない。それどころか、もし、他のすべての商品も同様に開展された価値形態をもつような諸商品のあいだの交換関係を想定しなければならぬのだとすれば、交換のそのような発展段階は、明らかに、すべての商品が——一般的等価物の成立もなしに——互いに全面的に交換しあっているような交換関係であるほかはない¹⁾。開展された価値形態を潜ませている交換関係としてここでまず想定されるべき交換関係は、そのような、多数の商品がいずれも相互的に交換される全面的な交換関係ではありえないのであって、他の諸商品は、商品 A と交換しているだけでなんらさしつかえないばかりでなく、むしろそのようなものでなければならぬのである。

たしかに、この場合にも、商品 A は単独の一商品とではなく多くの商品と交換関係をもつのであるから、そのかぎりでは、商品 A はここでは〈商品世界〉と関係をもつと言うことができるけれども、これが商品世界であるのは A にとってだけのことであり、あるいは A が自分で形成した世界なのであって、商品 B, C, D 等々にとっては、それらが他の多くの商品とともに同一の商品世界を形成している必要はまったくない。

それどころか、開展された価値形態とは商品 A の単純な価値形態の

「総和」²⁾なのであって、開展された価値形態を含む交換関係も、じつは二つの商品のあいだの交換関係の「総和」なのである。ただ、この「総和」が商品 A の側から見ると、「単純な相対的価値表現の総和」である開展された相対的価値表現となっている、ということなのである。

そうであるとすれば、単純な価値形態を潜ませていた、ただ二つの商品の交換関係、あるいは一商品の他の一商品にたいする価値関係に続いてとりあげられるべき、より発展した交換関係あるいは価値関係とは、論理的には、一商品が多く他商品にたいして価値関係をもち、多くの他商品と交換するが、これら他商品のほうでは、いずれもそれぞれまったく独立にこの一商品と価値関係をもち、この一商品と自らを交換している、という交換関係でなければならないであろう。開展された価値形態とはまさにこの交換関係に潜んでいるものなのである。

だからここでは、自己の価値を他の諸商品で表現している商品 A は同じ交換場面で他のすべての商品と交換していると想定する必要もない。相互にまったく独立した交換場面で交換が行なわれるのであったとしてもなんらさしつかえない。つまり、商品 B、C、D 等々の側では、ただ自己と商品 A との交換関係が、この 2 商品のあいだの交換関係がありさえすればいいのである。それは、言い換えれば、これらの他商品はいずれも依然として単純な価値形態をとっている、ということにほかならない。もちろん、そうであるかぎり、それらの他商品は互いに商品として自己の価値を比較しあうことはできていないということであるが、そもそも、ある商品の開展された価値形態が成立するためには、他商品がそのように商品として相互に比較しあうといったことはまったく必要ないのである。

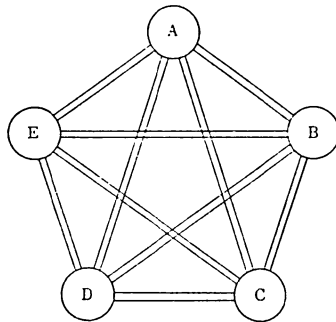
このような交換関係は、ただ論理的に想定できるだけではなくて、歴史的にある時期に存在した現実の交換関係に照応している。たとえば、ある遊牧民族が各地を転々としながら自己のある生産物、たとえば毛皮をそれぞれの土地の異なった特産物と交換するが、それぞれの土地の民族はまだこの遊牧民族との交換以外には交換を知らない、という社会状態がそれで

ある。このような現実の交換関係を表象してみることは、論理的な展開を曇らせるものであるどころか、むしろそれをよりよく理解させるものと言わなければならない³⁾。

さて、こうして、われわれは次の形態をもつことになる。

- 1) たとえば越村信三郎氏は、開展された価値形態について、「社会的分業が発展し、剰余生産物がいろいろな種類の生産物と交換されるようになると、単純な価値形態は、しだいに「総体的な、拡大された価値形態」へと発展していくのである。……B, C, D, E などという商品が、かわるがわる A 商品の立場に立つので、ますます交換価値の表現様式は複雑になってくる」と言われ、次の図を掲げられている（越村信三郎『経済学図説』，春秋社，1959 年，90 ページ）（第 21 図）。要するに、各商品がみな相互的に交換しあうような交換関係になって、開展された価値形態が成立するようになる、と言われるのである。

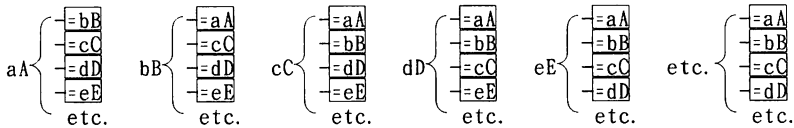
第 21 図 越村氏による開展された価値形態



この図に示されているのは、じつは、開展された価値形態そのものではなくて、『資本論』初版で「形態Ⅳ」とされているものに等しい。

初版本文の「形態Ⅳ」は、「形態Ⅱ」（本稿の形態 B）の開展された価値形態がある一つの商品、たとえば 20 エレのリンネルが他のあらゆる商品で自己の価値を表現していたのにたいして、この価値表現で等価物の位置に置かれているすべての商品が——つまりは商品世界のすべての商品が——それぞれ自己以外のすべての商品で自己の価値を表現する形態、つまりすべての商品が開展された価値形態を取っており、それらすべてが並存している、という形態である（MEGA, II/5, S.42-43.）（第 22 図）。

第 22 図 『資本論』初版での「形態Ⅳ」(aA は a 量の A 商品を表わす)



マルクスは、 $A \rightarrow B \rightarrow C$ という発展のなかで、20 エレのリンネルは、自己の価値の大きさを他の一つの商品で表わすことから始め (A)、次には自己の価値の大きさを他のすべての商品で表わし (B)、そして他のすべての商品の価値表現のための材料として役立つことで終わる (C) のだが、このリンネルに当てはまることはすべての商品に当てはまるはずだ、と言い、すべての商品について同時に $A \rightarrow B$ の発展が生じて、すべての商品が開展された価値形態を取って並存している上図の形態を掲げるのである。だからこの「形態Ⅳ」は、論理的に本来「形態Ⅲ」である一般的価値形態のあとにくるべきものでも、「形態Ⅲ」を逆転させたものでもありえない。それは、「形態Ⅱ」(形態 B) をすべての商品に与えて、それらを並存させてみたものなのである。

しかし、マルクスの意図は、価値形態が論理的にこのような形態にまで発展せざるをえない、ということを示すところにあったのではない。そうではなくて、むしろ逆に、このような、すべての商品の開展された価値形態を含むような交換関係が並存しているとして、そのそれぞれが同時に、その反対の側に一般的な価値形態をもつのだとすれば、そこではそれらの商品のすべてが同時に一般的等価物として役立っていることになるが、およそすべての商品が同時に一般的等価物であることはありえないのだ、ということを指摘するところにあったのである。

つまり、この形態を示すことによって、一般的等価形態は、商品世界から排除された一つの特定制品を等価物とする形態であるにもかかわらず、それまでの、価値概念と価値形態との不一致にもとづく形態展開の必然性の追求だけでは、そのように排除された商品が特定制品と癒着することを説明できないのであって、この点については改めて——交換過程のところで——論じられなければならないのだ、ということを示唆しているのである。

要するに、すべての商品がそれぞれ他のすべての商品と価値関係にはいり、全面的に交換しあうような関係は、およそ、貨幣なしには成立しようのないものである。開展された価値形態そのものは、そのような交換関係を想定するものではまったくない。これについて類似の誤解をしている論者は少なくないのであって、ここでとくに越村氏をとりあげたのは、氏がこの誤解を図によって端的に示しておられたからである。

- 2) 開展された相対的価値表現が「単純な相対的価値表現の総和」であることについては、マルクスの次の記述を見られたい。

「第2の形態は、第1の形態の諸等式の総和からなっている。」(『資本論』第1部初版本文, MEGA, II/5, S.36, 強調—マルクス。)

「じっさい、リンネルの完全な相対的価値表現は、ばらばらの単純な相対的価値表現のなかではなくて、リンネルのもろもろの単純な相対的価値表現の総和のなかにあるのである。」(『資本論』第1部初版付録, MEGA, II/5, S.642, 強調—マルクス。)

「全体的な、または開展された相対的価値形態は、ただ、もろもろの単純な相対的価値表現の、すなわち第1の形態の諸等式の総和からなっているにすぎない。」(『資本論』第1部初版付録, MEGA, II/5, S.642, 『資本論』現行版, MEGA, II/10, S.64, 強調—マルクス。)

だから、この価値表現が想定する交換関係は、反対の極を個別的に見れば、いずれも単純な交換関係でしかないものであり、そこに含まれている価値表現も単純な価値表現でしかないのである。

- 3) マルクスが『資本論』第2版で、「開展された価値形態がはじめて実際に現われるのは、ある労働生産物、たとえば家畜がもはや例外的ではなくすでに慣習的にさまざまな他の商品と交換されるようになったときのことであり」と述べているのは、筆者がここで想定したような交換関係についてであると考えられる。これは、単純な価値形態について、「明らかに、この形態が現われるのは、労働生産物が偶然的なときおりの交換によって商品にされるような最初の時期だけのことであり」としているのに対応するものである(MEGA, II/6, S.97)。マルクスが第2版でこれらの叙述を挿入したことについて、論理的な叙述を歴史的な叙述に変えるものだとする非難が蔓延しているが、この非難は、論理的な叙述も歴史的な例証をもちうることを、そしてこれらの叙述はまさにそのような例証にすぎないことを理解できないところから生じるものである。

マルクスは、ヨハン・モストの『資本と労働』の改訂のために書き加えた部分のなかで、価値形態について次のように書いた。

「さてここで交換価値に、つまり諸商品の価値が表現されるさいの形態に立ち戻ろう。この価値形態は生産物交換から、また生産物交換とともに、しだいに発展してくる。

生産がもっぱら自家需要に向けられているかぎり、交換はごくまれに、それも交換者たちがちょうど余剰分をもっているようなあれこれの対象について、生じるにすぎない。たとえば毛皮が塩と、しかもまず最初はまっ

たく偶然的なもろもろの比率で交換される。この取引がたびたび繰り返されるだけでも、交換比率はだんだん細かにきめられるようになり、1枚の毛皮はある一定量の塩とだけ交換されるようになる。生産物交換のこの最も未発展の段階では、交換者のそれぞれにとって、他の交換者の財貨が等価物として役立っている。すなわち、それ自体として彼の生産した財貨と交換可能であるばかりでなく、彼自身の財貨の価値を見えるようにする鏡でもあるような、価値物として役立つのである。

交換のその次に高い段階を、われわれはこんにちでもまだ、たとえばシベリアの狩猟種族のところで見いだす。彼らが提供するの、交換向けのほとんどただ1つの財貨、つまり毛皮である。ナイフ、武器、火酒、塩等々といった彼らに供給される他人のすべての商品が、彼らにとってはそっくりそのまま、彼ら自身の財貨のさまざまな等価物として役立つ。毛皮の価値がこうして受け取る表現が多様であることは、この価値を生産物の使用価値から分離して表象することを習慣にするが、他方では、同一の価値をたえず増大する数のさまざまな等価物で計量することが必要となる結果、この価値の大きさの規定が固定するようになる。つまり、ここでは毛皮の交換価値はすでに、以前ばらばらに行なわれていただけの生産物交換の場合に比べて、はるかにはっきりした姿をもっているのであり、したがってまた、いまではこれらの物そのものもすでに、はるかに高い程度で商品という性格をもっているのである。

こんどはこの取引を、異郷の商品所持者の側から観察してみよう。彼らのおのおのはシベリアの狩人たちにたいして、自分の財貨の価値を毛皮で表現しなければならない。こうして毛皮は、一般的等価物になる。一般的等価物は、他人のすべての商品と直接に交換可能であるばかりでなく、また他人のすべての商品にとって、共通の価値表現のために、したがってまた価値を計るものおよび価値を比較するものとしても役立つ。言い換えれば、毛皮は生産物交換のこの範囲のなかでは、貨幣となるのである。総じて同じようにして、あるときはこの商品が、あるときはあの商品が、広狭さまざまな範囲で、貨幣の役割を演じた。商品交換の一般化につれて、この役割は金銀に、すなわち生まれながらにこの役割に最も適している商品種類に移って行く。金銀は一般的等価物となるのであって、これは他のすべての商品と直接に交換可能であり、また他のすべての商品がいっしょにこれで自分たちの価値を表現し、計り、比較しあうのである。貨幣で表現された商品の価値は、商品の価格と呼ばれる。たとえば、20 エレのリンネル＝2分の1オンスの金 であり、かつ 10 ターレルが2分の1オンス

の金の貨幣名であるときには、20エレのリンネルの価値の大きさは、10ターレルという価格で表現される。」（拙訳、ヨハン・モスト『資本論入門・テキスト版』、岩波書店、1987年、10-12ページ、強調—マルクス。）

一見すると、ここでは価値形態論と交換過程論とがないまぜにされているように思われるかもしれない。しかし、じつは、ここには交換過程論の主要な内容はまったく欠落しているのであって、むしろ、ここにあるすべてが価値形態についての平易な説明であると言わなければならない。そして、注目すべきは、単純な価値形態から開展された価値形態を経て一般的価値形態にいたる価値形態の発展が、すべて交換関係の提示から始められていることであり、とりわけ、開展された価値形態を含む交換関係として、「シベリアの狩猟種族」が彼らの毛皮を「異郷の商品所持者」のもつ「彼らに供給される他人のすべての商品」と交換するという関係があげられていることである。これはまさに、本文で述べたような交換関係にほかならない。

交換過程論にはいって、マルクスは次のように書いているが、これもいまここで見てのような、交換関係の発展の必然的な通過段階を示唆している。

「遊牧民族は最初に貨幣形態を發展させるのであるが、それは、彼らの全財産が可動的な、したがって直接に譲渡可能な形態にあるからであり、また、彼らの生活様式が彼らをたえず他の共同体組織と接触させ、したがって彼らに生産物交換を促すからである。」（『資本論』第1部、MEGA, II/10, S.86、強調は初版でのマルクスによるもの。）

なお、モストの書でのマルクスの説明では、価値表現の回り道をはじめ、価値形態論の肝要な点が欠落している。このことは、マルクスが、『資本論』の内容を平易に解説するときには、価値形態論の困難な部分をこのようなかたちで省略してもいいと考えていたことを示しているものである。

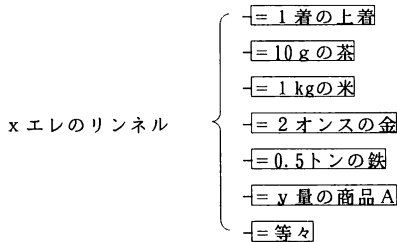
B 全体的な、または開展された価値形態

(1) 形態そのもの

新たな形態は、次のようなものである（第23図）。

この形態が〈全体的な価値形態〉と呼ばれるのは、それが他商品の全体によって自己の価値を表現しているからであり、〈開展された価値形態〉と呼ばれるのは、それがいわば自己を要^{かなめ}として扇を開いていくかたちを取っているからである¹⁾。

第23図 開展された価値形態



- 1) 「開展された」の原語は *entfaltet* である。「展開された」という訳語では、この語のもっているこのような含意が見えにくい。「開展された」という訳語は長谷部文雄氏のものであるが、こうした含意を表わそうとして採用されたものであったと思われる。

(2) 開展された相対的価値形態

リンネルの価値は、商品世界を構成している他の無数の商品で表現される。他の商品体はどれでもリンネル価値を映す鏡になる。

リンネルの価値は、ここではじめて真に、無区別な人間的労働の凝固として現われる。というのは、このリンネル価値を形成する労働が、いまでははっきりと、他のどんな労働でも——どれがどんな現物形態をもっていようと、したがってそれがどんな使用価値に対象化していようと——それに等しいとされる労働として、つまり抽象的人間的労働として、表わされているからである。

こうしていまでは、リンネルは自分の価値形態を通じて、他の一つの商品種類と社会的関係を取り結ぶだけではなく、商品世界と社会的関係を取り結んでいる。リンネルは、商品としてはこの世界の市民なのである¹⁾。

同時に、商品価値の表現の無限の列によって、商品価値はそれが現われる使用価値の特殊的な形態には無関係であることが示されている。たとえばリンネルの価値は、いまではあらゆる可能な形態で、すなわち上着に等しいもの、鉄に等しいもの、茶に等しいもの、等々として、つまりただリンネル以外の他のあらゆるものに等しいものとしてリンネルの現物形態に

相対しており、それゆえここでは、第1の形態よりももっと完全に、一商品の価値がその商品自身の使用価値から区別されているのである。

単純な価値形態 x エレのリンネル $- \boxed{= y \text{ 着の上着}}$ を含む交換関係、すなわち x エレのリンネルと y 着の上着との交換関係では、 x と y とがある比率に落ち着いているのは偶然的な事実でしかないかもしれない。これにたいして、開展された価値形態では、2人の商品所持者の偶然的な関係はなくなっている。ここではただちに、偶然的な現象とは本質的に違っていて、むしろそれを規定している背景、すなわち、リンネルの価値は、どの商品所持者のもっているどんな商品で表現されようと、つねに同じ大きさのものなのだ、ということが現われ出てくる。交換が商品の価値量を規制するのではなくて、逆に、商品の価値量が商品の交換比率を規制するのだ、ということが明らかとなるのである。

- 1) ただし、この「商品世界」は、さしあたり、リンネルが他の諸商品を自己の価値表現の材料にすることによって、すなわちリンネルが他の諸商品にたいして価値関係をもつことによって形成されるもの、つまりリンネルがつくりあげる世界である。

(3) 特殊な等価形態

リンネルの価値表現のなかで、上着、茶、コーヒー、等々はどれでも、リンネルにとって等価物であり、したがってまた価値体である。これらの商品の現物形態は、いずれもみなそれぞれが、他のものと並ぶ一つの特殊な等価形態である。

同様に、それぞれの商品体に含まれているそれぞれ特定の具体的有用的労働も、それらのすべてがそっくりそのまま、抽象的人間的労働の特殊な実現形態または現象形態として認められているのである。

(4) 全体的な、または開展された価値形態の欠陥

開展された相対的価値形態には、次のような欠陥がある。

1) 商品の相対的価値表現は、その表示の列が完結することがないので、未完成である。

2) その列は、さまざまな使用価値による雑多な価値表現の寄り集まりであって、統一性を欠いている。

3) もしも、どの商品も自分の価値をこの開展された形態で表現するとすれば、どの商品の相対的価値形態も、それぞれみな違った無限の価値表現列である。それぞれの商品の価値表現のなかでは、他のすべての商品はただ等価物の形態で現われるだけであるから、ここでは諸商品の共通な価値表現はすべて直接に排除されている。

相対的価値形態のこれらの欠陥は、等価形態に反映する。

1) 等価形態にある諸商品の現物形態のそれぞれが、互いに並ぶ特殊的な等価形態なのだから、ひとつひとつの特殊的な等価形態は全体の一部分をなす制限された等価形態にすぎない。しかもここには、こうした制限された等価形態しか存在しない。

2) 同様に、それぞれの特殊的等価物に含まれている特定の具体的有用的労働も、それぞれただ、抽象的人間的労働の特殊的な、部分的な現象形態でしかない。抽象的人間的労働はたしかに、その完全な現象形態を、これらの特殊的な現象形態の全体のなかにもってはいるが、しかし統一的な現象形態をもっていないのである。

(5) 全体的な価値形態から一般的な価値形態への移行

単純な価値形態が、価値を表現するのによりふさわしい形態にむかって一步前進して、開展された価値形態に発展するように、価値形態としていまだ欠陥をもつ開展された価値形態もさらに一步前進して、価値の概念により適合する形態に移行していかざるをえない。その形態は、開展された価値形態が単純な価値形態のなかに潜在的に含まれていたものであったように、開展された価値形態のなかに潜在的に含まれているものでなければならない。それはどのような形態であろうか¹⁾。

開展された相対的価値形態は、単純な相対的価値表現の諸等式、

$$x \text{ エレのリンネル} - \boxed{= 1 \text{ 着の上着}}$$

$$x \text{ エレのリンネル} - \boxed{= 10g \text{ の茶}}$$

等々の総和から成っている。これらの等式は、それらを潜ませているリンネルの交換関係をとるならば、反対の側に、

$$1 \text{ 着の上着} - \boxed{= x \text{ エレのリンネル}}$$

$$10g \text{ の茶} - \boxed{= x \text{ エレのリンネル}}$$

等々の価値表現を含んでいる。

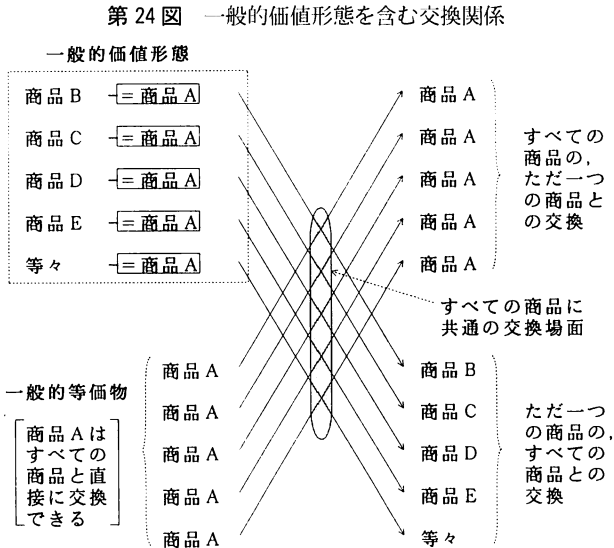
じっさい、ある人が自分のリンネルを他の多くの商品と交換し、したがってまたリンネルの価値をそれらの商品で表現するならば、必然的に、他の多くの商品所持者もそれぞれ自分の商品をリンネルと交換しなければならず、したがってまたそれぞれ自分の商品の価値を、みな同じ商品、リンネルで表現しなければならないわけである。

すでに述べたように、これらの他商品が相互にまったく無関係に存在して、相互にまったく無関係にリンネルと交換するのであれば、それらの商品がもつ価値形態は単純な価値形態でしかない。けれども、ここで生じる交換関係の発展の方向は、リンネルばかりでなく、これら他商品のほうでも他の多くの諸商品と交換関係を結び、したがってこれらの諸商品がみな同一の場で交換されるようになっていく、というものであるほかはない。その行き着くところは、リンネルの開展された価値形態を潜めている交換関係のなかで、リンネルにたいする多くの他商品の側でも、互いに商品として関わりをもち、同じ商品世界を形成しているということ、どの他商品もリンネルと交換しようとしているということである。そして、一方の側に開展された価値形態を含む交換関係は、他方の側にそのような多くの商品が立つことを排除するものではないのである²⁾。

そこで、そのようなところまで発展した交換関係を想定して、開展された価値形態を形成している $x \text{ エレのリンネル} - \boxed{= 1 \text{ 着の上着}}$ または $- \boxed{= 10 \text{ ポンドの茶}}$ または 等々、という列を逆にすれば、すなわち、こ

の列が想定する交換関係に含まれている逆の関係を言い表してみれば、これまでの価値形態とは異なる新しい価値形態が与えられる。

そこで、そのような交換関係とそこに含まれる新たな価値形態とを図示してみよう（第 24 図）。



この交換関係で注目すべきは、商品 A を除くすべての商品が、共通の相対的価値形態をもっており、それによって共通の商品世界を形成しているのにたいして、商品 A は、それらの商品がもつものと同じ意味での相対的価値形態をもっていない、もつ必要がないということ、そしてそうであるのは、それが、他のすべての商品によってそれらの形成する商品世界から排除されているからだ、ということである。商品 A のほうは、「商品 X の価値が自分の価値と等しいことを認める、だから商品 X とであればただちに交換する」、と言う必要がまったくない。商品 A は、交換しようとするれば、一般的価値形態にあるあらゆる商品とただちに交換できるのである。

この新たな価値形態が、開展された価値形態のなかに、ただしそれが想定する一商品の交換関係のなかに逆連関的に、だから潜在的に、含まれていたものであったことは明らかである。こうして、価値を表現するのに不十分な開展された価値形態は、そのなかに潜在的に含まれているこの新たな価値形態に進んでいかざるをえない。

そこで、この新たな交換関係に見られる、商品 A 以外のすべての商品が商品 A に関価値関係から、新たな価値表現をとりだしてみよう。

- 1) 以下ここで述べるのは、『資本論』第 2 版での次の叙述が含意していると筆者が考えているものである。――

「とはいえ、開展された相対的価値形態は、単純な相対的価値表現すなわち第 1 の形態の諸等式の総和から成っているにすぎない。たとえば、

20 エレのリンネル = 1 着の上着

20 エレのリンネル = 10 重量ポンドの茶

などの総和からである。

しかし、これらの等式は、それぞれ、逆の連関では〔rückbezüglich〕、また次のような同じ意味の等式をも含んでいる。すなわち

1 着の上着 = 20 エレのリンネル

10 重量ポンドの茶 = 20 エレのリンネル

などを含んでいる。

じっさい、ある人が彼のリンネルを他の多くの商品と交換し、したがってまたリンネルの価値を一連の他の商品で表現するならば、必然的に他の多くの商品所持者もまた彼らの商品をリンネルと交換しなければならず、したがってまた彼らのさまざまな商品の価値を同じ第 3 の商品で、すなわちリンネルで表現しなければならない。――そこで、20 エレのリンネル = 1 着の上着 または = 10 重量ポンドの茶 または = 等々 という列を逆にすれば〔umkehren〕、すなわち事実上すでにこの列に含まれている逆の連関〔Rückbeziehung〕を言い表わしてみれば、次の形態が与えられる。……」（『資本論』第 1 部第 2 版、MEGA, II/6, S.96、強調―引用者。）

- 2) ここで、次のことに注意されたい。さきに、ある商品の開展された価値形態を含む交換関係は、他方の諸商品の側では単純な価値形態であるような関係として想定されたのであるが、それは、この新しい価値形態を含む交換関係がそ

のようなものでありさえすればよかったのであり、それ以上のことは考える必要がなかったからである。けれども、ある商品の開展された価値形態を含む交換関係は、それ自体としては、他方の側に商品が相互になんらかの様態で商品として関わり、相互に商品世界を形成することを排除するものではないのである。そして、この開展された価値形態が潜在的に含む新たな価値形態を探るときには、まさにこの他方の諸商品の、この商品にたいする共同的な関わりの可能性が前面に出てくるのである。

さきに注記した、モストの書物での書き入れでマルクスが、「こんどはこの取引を、異郷の商品所持者の側から観察してみよう」、として、一挙に一般的等価物の成立に移っているのも、そのような趣旨であると考えられる。

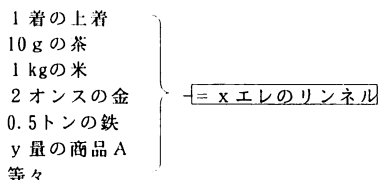
マルクスのこの記述から、開展された価値形態と一般的な価値形態とは、一つの商品と他のすべての商品との同一の交換関係に潜んでいる二つの価値表現にすぎず、まず一つの商品の側から見れば開展された価値形態であり、次に他のすべての商品の側から見れば一般的価値形態である、というふうに、たんに視点を変えて見ているものだ、と考えてはならないであろう。そうではなくて、開展された価値形態を含む交換関係と一般的価値形態を含む交換関係とのあいだには、交換関係の発展があるのである。その意味では、モストの書のここでのマルクスの記述はやや舌足らずであって、誤解を招く可能性があると言わなければならない。

C 一般的価値形態

(1) 形態そのもの

新たな形態は次のようなものである（第 25 図）。

第 25 図 一般的価値形態



(2) 相対的価値形態の変化した姿

相対的価値形態はいまでは、まったく変化した姿をもっている。すべて

の商品が自分の価値を、1) 単純に表わしている。なぜなら、それらは単独の商品で表わしているのだからである。そして、すべての商品がそれらの価値を、2) 統一的に表わしている。なぜなら、同一の商品で表わしているのだからである。ここでは諸商品の価値形態は単純かつ共通、それゆえ一般的である。そこで、この形態は一般的価値形態と呼ばれる。

新たに得られたこの形態は、商品世界の諸価値を、商品世界から排除された一つの同じ商品種類、たとえばリンネルで表現し、こうして、すべての商品の価値を、その商品とリンネルとの同等性によって表わしている。以前の二つの形態はどちらも、一商品の価値を、その商品自身の使用価値または商品体とは違ったものとして表現することしかできなかったのにたいして、いまではどの商品の価値も、その商品自身の使用価値から区別されているだけでなく、リンネルと等しいものとして、いっさいの使用価値から区別され、まさにこのことによって、その商品とすべての商品とに共通なものとして表現されている。それだからこそ、この形態がはじめて現実に、商品世界の諸商品を相互にたいして、価値であることを認める状態で連関させるのであり、言い換えれば、諸商品を互いに交換価値として現われさせるのである。こうして諸商品は、この価値形態において一般的社会的な形態をもつことになる。

このような一般的な性格をもつことで、価値形態はここではじめて、価値概念にふさわしいものとなった。価値形態はもともと、諸商品が無区別な同じ抽象的人間的労働の凝固、物的な諸表現として互いに現われ合うために取る形態であるべきものであった。このことはいまでは達成されている。なぜなら、諸商品はすべて、同じ労働の、すなわちリンネルに含まれている労働の物質化として、すなわちリンネルとして、表現されているのだからである。こうして、諸商品は質的に同等なものとして、すなわち価値一般として現われているのである。

以前の二つの形態は、一つだけの商品によってであれ、一連の多数の商品によってであれ、一商品の価値を表現しているだけであった。どちらの

場合にも、自分に価値形態を与えることは、いわば個々の商品の私事であって、それは他の諸商品の助力なしにこれをなしとげる。他の諸商品のほうは、ただこの商品にたいしてのみ、受動的に等価物という役割を演じたのであった。これに反して、一般的価値形態は、商品世界の共同の仕事としてのみ成立する。ここでは、一つの商品が一般的価値表現を受け取るのは、同時にそれ以外のすべての商品が自分たちの価値をこの同じ等価物で表現するからにはかならない。そして、新たに現われるどの商品種類もこれにならなければならないのである。こうして、ここではっきりと現われてくるのは、諸商品の価値は純粋に社会的な定在であるからこそ、それは諸商品の全面的な社会的連関によって表現されるほかはないのだということ、したがって諸商品の価値形態は社会的に認められた形態でなければならないのだ、ということである。

いまや、リンネルに等しいもの、という形態では、すべての商品が、質的に等しいもの、つまり価値一般として現われるだけではなく、同時に、量的に比較されうる価値量として現われる。すべての商品がそれぞれの価値量を、リンネルという同じ一つの鏡に映すので、これらの価値量は互いに比べあうことになる。たとえば、10g の茶 = 20 エレのリンネル で 40g のコーヒー = 20 エレのリンネル だから、10g の茶 = 40g のコーヒー だ、あるいは、1g のコーヒーに含まれている価値実体すなわち労働は 1g の茶に含まれているその 1/4 だ、という具合にである。

(3) 等価形態の変化した姿

商品世界の一般的な相対的価値形態は、商品世界から排除された等価物商品、つまりリンネルに一般的等価物という性格を押しつける。リンネル自身の現物形態がこの世界の共通な価値の姿なのであり、それだから、リンネルは他のすべての商品と直接に交換されうるのである。リンネルの物体形態は、いっさいの人間の労働の目に見える化身、その一般的な社会的蛹化^{ようか}として通用する。織布、すなわちリンネルを生産する私的労働が、

同時に、一般的な社会的形態に、すなわち他のすべての労働との同等性の形態にある。一般的価値形態を形成している無数の等式は、リンネルに実現されている労働を、それ以外の商品に含まれているそれぞれの労働に順々に等置し、こうすることによって織布を人間的労働一般の一般的な現象形態にするのである。このようにして、商品価値に対象化されている労働が、消極的に、現実の労働のすべての具体的形態と有用的属性とが捨象されている労働として表わされているだけではない。この労働自身の積極的な本性がはっきりと現われてくる。この労働は、いっさいの現実の労働がそれらに共通な人間的労働という性格に、人間の労働力の支出に還元されたものなのである。

どの労働生産物をも無区別な人間的労働のたんなる凝固として表わす一般的価値形態は、それ自身の骨組み〔Gerüst〕によって、それが商品世界の社会的表現であることを示している。こうして一般的価値形態は、この商品世界のなかでは労働の一般的な人間的性格が労働の独自の社会的性格となっているのだ、ということを明るみに出すのである。

(4) 相対的価値形態と等価形態との対応的な発展関係

相対的価値形態の発展の程度には、等価形態の発展の程度が対応する。しかし、注意が必要であるのは、等価形態の発展はただ相対的価値形態の発展の表現、結果でしかない、ということである。イニシアティヴを取るの、つねに後者のほうである。

一商品の単純な、または単独な相対的価値形態は、他の一商品を単独な等価物にする。相対的価値形態の開展された形態、すなわちすべての他の商品での一商品の価値の表現は、これらの商品にさまざまに違った種類の特殊の等価物という形態を刻印する。最後に、ある特別な商品種類が一般的等価形態を与えられるのであるが、それは、すべての他の商品がこの商品種類を自分たちの統一的な一般的価値形態の材料にするからである。

(5) 相対的価値形態と等価形態との対極性の発展

しかし、価値形態一般が発展するのと同じ程度で、その二つの極の対立、相対的価値形態と等価形態との対立もまた発展する。

すでに第1の形態もこの対立を含んではいるが、それを固定させてはいない。同じ等式が前のほうから読まれるかあとのほうから読まれるかに従って、すなわち、20 エレのリンネル $- \boxed{= 1 \text{ 着の上着}}$ であるのか、それとも 1 着の上着 $- \boxed{= 20 \text{ エレのリンネル}}$ であるのか、ということによって、リンネルと上着という二つの商品極のそれぞれが、どちらもあるときは相対的価値形態にあり、あるときは等価形態にある。両極の対立をしっかりとつかんでおくには、抽象力を駆使することが必要である。

形態 B でも、やはりただ一つ一つの商品種類がそれぞれの相対的価値を全体的に開展しうるだけである。言い換えれば、すべての他の商品がその商品種類にたいして等価形態にあるからこそ、またそのかぎりでのみ、その商品種類自身が、開展された相対的価値形態をもつのである。けれども、ここではもはや、価値等式の両辺を置き換えることは、この形態の全性格を変えて、もとの単純な価値表現に戻るか、さもないければこれを全体的価値形態から一般的価値形態に転化させるかすることなしには、不可能である。

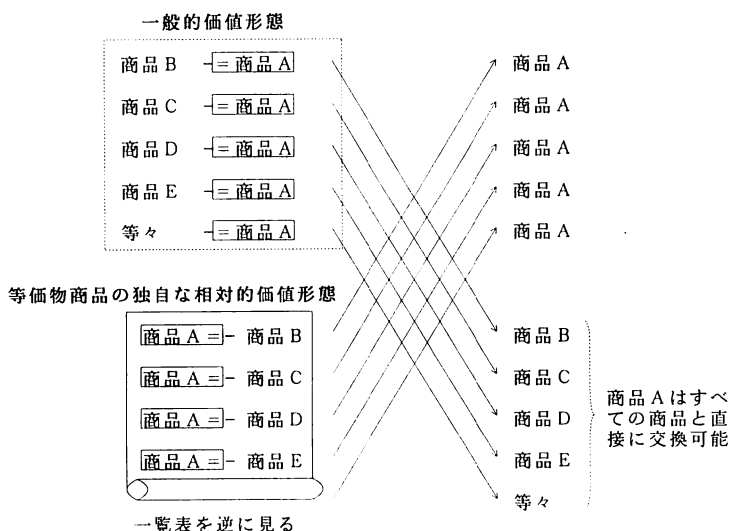
このあとのほうの形態、すなわち一般的価値形態が、最後に商品世界に一般的・社会的な相対的価値形態を与えるのであるが、それは、ただ一つの例外だけを除いて、商品世界に属する全商品が一般的等価形態から排除されているからであり、またそのかぎりでのことである。したがって、一商品、リンネルが他のすべての商品との直接的交換可能性の形態または直接的に社会的な形態にあるのは、他のすべての商品がこの形態をとっていないからであり、またそのかぎりでのことなのである。

反対に、一般的等価物の役を演じる商品は、商品世界の統一的な、したがってまた一般的な相対的価値形態からは排除されている。もしもリンネ

ルが、すなわち一般的等価形態にあるなんらかの商品が、同時に一般的相対的価値形態にも参加するとすれば、その商品は自分自身のために等価物として役立たなければならないであろう。その場合には、20 エレのリンネル $\text{—} = 20 \text{ エレのリンネル}$ となり、それは価値をも価値量をも表わしていない同義反復になるであろう。

だから、一般的等価物となっている商品の価値を相対的に表現するためには、形態 C を逆にしなければならない。そうすれば、その価値は、他のすべての商品体の無限の列で相対的に表現されることになる。形態 C を逆にすれば、ふたたび形態 B が現われるのだから、いまや、開展された価値形態すなわち形態 B が、等価物商品の独自の相対的価値形態として現われているのである。ただし、等価物商品の価値を表現する商品体の列は、等価物である商品が直接に交換しうる他の諸商品のそれぞれの量を示す等式の列であって、形態から見れば開展された相対的価値形態と同じものではあるが、それは事実上、商品世界に属するすべての商品の一般的価値表現の無限の列を、あるいはその一覧表を逆に読んだものにほかな

第 26 図 等価物商品の独自の相対的価値形態



らない。だからそれは、等価物商品の独自の相対的価値形態と言われるのである（第 26 図）。

（6）一般的価値形態から貨幣形態への移行

素材的にまったく違っているもろもろの労働生産物は、同等な人間的労働の物的な諸表現として表わされていなければ、完成した商品形態をもつことができず、したがってまた、交換過程において商品として機能することもできない。だから、完成した商品形態をもつためには、労働生産物は統一的な、一般的な相対的価値形態をもたなければならない。そしてそのためには、ある一つの商品に一般的等価形態を与え、それを一般的等価物にしなければならない。

ところで、一般的等価形態は価値がとる形態である。そして、どの商品も価値なのだから、一般的等価形態どの商品に付着してもよいものである。

しかし、ある商品が一般的等価形態にあるのは、ただ、それが他のすべての商品によって等価物として商品世界から排除されるからでしかなく、また排除されるかぎりにおいてでしかない。

一つの商品が他の一つの商品で自己の価値を表現する単純な価値形態でも、一方の商品が、他方の商品を排除して、この商品で自己の価値を表現する。一つの商品が他のすべての商品で自己の価値を表現する開展された価値形態でも、一方の商品が、他方のすべての商品を排除して、この商品で自己の価値を表現する。けれども、このどちらの形態にあっても、この排除は、相対的価値形態に立っただ一つの商品の側からなされる一方的な過程であり、他のすべての商品のなんらの助力も必要としないものであって、この商品の所持者によるまったく主観的な過程でありうる。

これに対して、ある商品を一般的等価物とする排除は、商品世界に属するすべての商品によって行なわれるものであり、またそういうものでなければならない。だから、排除はこの場合には、排除される商品からは独立

した客観的な過程である。だからこそ、商品形態の歴史的発展においては、あるときにはこの商品が、またあるときにはこの商品が、という具合に、さまざまな商品がかわるがわる一般的等価物となることができたのである。けれども、いずれの場合でも、ある商品が現実一般的等価物として機能するのは、その排除が、したがってまたその等価形態が、客観的な社会的過程の結果であるかぎりにおいてである。そして、この排除が最終的に一つの独自の商品種類に限定された瞬間から、はじめて商品世界の統一的な相対的価値形態は客観的な固定性と一般的な社会的妥当性とをかちえたのである。

そこで、その現物形態に等価形態が社会的に癒着した特殊な商品種類は、貨幣商品になる。言い換えれば、貨幣として機能する。商品世界のなかで一般的等価物の役割を演じるということが、その商品の独自の社会的機能となり、したがってまたその商品の社会的独占となる。このような特権的な地位を、形態 B ではリンネルの特殊な等価物の役を演じ、形態 C では自分たちの相対的価値を共通にリンネルで表現しているさまざまな商品のなかで、ある一定の商品が歴史的にかちとった。すなわち、金である。そこで、形態 C のなかにある商品リンネルを商品金に取り替えれば、次の形態、つまり貨幣形態が得られるのである。

D 貨幣形態

(1) 形態そのもの

新たな形態は次のとおりである（第 27 図）。

(2) 一般的価値形態から貨幣形態への移行とそれ以前の移行との相違

形態 A から形態 B への、また形態 B から形態 C への移行では、本質的な変化が生じている。これに反して、形態 D は、いまではリンネルに代わって金が一般的等価形態をもっているということのほかには、形態 C と違うところはなにもない。形態 D では金は、やはり、リンネルが形態

第 27 図 貨幣形態

20 エレのリンネル	= a g の金
1 着の上着	= b g の金
10 g の茶	= c g の金
40 g のコーヒー	= d g の金
1 kg の米	= e g の金
2 オンスの金	= f g の金
1/2 トンの鉄	= g g の金
x 量の商品 A	= h g の金
等々	= 等々

C でそれだったもの、すなわち一般的等価物である。前進は、ただ、直接的な一般的交換可能性の形態または一般的等価形態がいまでは社会的慣習によって最終的に商品金の独自の現物形態と癒着しているということだけである。

金が他の諸商品に貨幣として相対するのは、金が他の諸商品にたいしてすでに以前から商品として相対していたからにはほかならない。すべての他の商品と同じように、金もまた、個々別々の交換行為で単独な等価物としてであれ、他のさまざまな商品等価物と並んで特殊的等価物としてであれ、等価物として機能していた。しだいに、金は、あるいはより狭い、あるいはより広い範囲のなかで一般的等価物として機能するようになった。それが商品世界の価値表現においてこの地位の独占をかちとったとき、それは貨幣商品になる。そして、金がすでに貨幣商品になってしまった瞬間から、はじめて形態 D は形態 C と区別されるのであり、言い換えれば一般的価値形態は貨幣形態に転化しているのである。

(3) 一般的な相対的価値形態の価格形態への転化

すでに貨幣商品として機能している商品での、たとえば金での、一商品たとえばリンネルの単純な相対的価値表現は、価格形態である。それゆえ、リンネルの価格形態は次のようなものである。

$$x \text{ エレのリンネル} - \boxed{= y \text{ g の金}} \quad (20 \text{ エレのリンネル} - \boxed{= 75 \text{ g の金}})$$

いま、zmg, たとえば 750mg の金に <円> という貨幣名をつければ、

$$x \text{ エレのリンネル} - \boxed{= y/z \text{ 円}} \quad (20 \text{ エレのリンネル} - \boxed{= 100 \text{ 円}})$$

である。

(4) 単純な商品形態は貨幣形態の秘密である

こうして、本来の貨幣形態をそれ自体として見るなら、それには難しいことはなにもない、ということが分かる。ひとたび、貨幣形態が発展した一般的な等価形態であることが見抜かれていさえすれば、この等価形態が、遅かれ早かれ独自の商品種類に、たとえば金に固着する、ということを理解するのには、いささかも頭を悩ます必要はない。このことは、一般的な等価形態がもともと、一定の商品種類を他のすべての商品が社会的に排除することによって成立するものであるのだから、なおさらなのである。この成立のあとに残る問題は、もはやただ、この排除が、かわるがわるさまざまな商品に付着するのでもなければ、商品世界のたんに特殊な圈内でたんに局地的な射程をもつのもなく、客観的社会的な堅固さと一般的社会的な妥当性とを獲得する、ということだけである¹⁾。

貨幣形態を概念的に把握するさいの困難は、一般的等価形態の、したがって、一般的価値形態一般の、形態 C の、理解に限られる。形態 C は、逆の連関で形態 B に、開展された価値形態に帰着し、そして形態 B の構成要素は、形態 A、すなわち 20 エレのリンネル - $\boxed{= 1 \text{ 着の上着}}$ または x 量の商品 A - $\boxed{= y \text{ 量の商品 B}}$ なのである。

そこで、使用価値と価値とがなにかを知っているなら、この形態 A は、任意の労働生産物たとえばリンネルを、商品として、すなわち使用価値と価値という両対立物の統一として表わす、最も単純で最も未発展な仕方だ、ということがわかる。そうすれば同時に、単純な商品形態 20 エレのリンネル - $\boxed{= 1 \text{ 着の上着}}$ が、その完成した姿 20 エレのリンネル - $\boxed{= 100 \text{ 円}}$ すなわち貨幣形態を獲得するために通らなければならないもろもろの変態

列も容易に見いだされるのである²⁾。このように単純な価値形態すなわち単純な商品形態は、貨幣形態の萌芽であり、貨幣形態の秘密である。だからこそわれわれは、まずもってこの形態を徹底的に分析し、そのうえで、それから貨幣形態にいたるまで価値形態を展開してきたのである。

- 1) このパラグラフで言われていることがどのようにして行なわれるかということについては、別稿「商品および商品生産」の【補論 4】「交換過程と貨幣生産の必然性」で述べたので、参照されたい。
- 2) 以上のことを、マルクスは初版の付録での価値形態論の最後のところで述べており、これによって、これまでの価値形態の分析の進め方、すなわち、まず単純な価値形態を徹底的に分析し、それから単純な価値形態から貨幣形態にいたるまでの価値形態の発展を示す、という進行の根拠が明らかにされている(MEGA, II/5, S.648-649; MEGA, II/10, S.70)。

けれども、このことは、ここにいたるまではその分析の進行の理由がまったくブラックボックスのなかにあり、ここではじめてそれが説明されたのだ、ということの意味するわけではまったくない。分析の進行は、価値の本質から価値の現象形態へ、そして価値の最も単純な現象形態を価値の本質の認識にもとづいて分析して、形態そのものの根幹を明らかにし、そのうえで、価値を表現するのによりふさわしい、すなわち価値概念により一致する形態に内的に移行していく過程を追うことによって、一般的価値形態にまで到達したのである。A → B → C という論理的な展開のさいに、その展開を必要にするものを〈展開の動力〉と呼ぶとすれば、それは価値概念と価値形態との不一致、矛盾である。それが、すでに認識されていた価値概念と事実としての価値形態との不一致であるとかぎりでは、それは認識と事実との不一致である。科学研究は、つねに、すでに得られた認識と新たに与えられた事実との不一致ないし矛盾を、〈解くべき問題〉あるいは〈謎〉として設定して、その解明に努めることによって前進する。価値形態論における〈動力〉もそうした意味のものである。そのかぎりでは、それはなにも価値形態論のみに固有のものであるわけではない。

しかし、価値形態論は、マルクス自身が彼の第2版序文で認めているように、『資本論』のなかで、例外的に難解な箇所である。だからマルクスは、価値形態論の末尾で、そのような分析の進行が、じつは研究の過程での貨幣形態の分析の過程を逆に遡及することになっているのだ、ということを示すことによって、価値形態の分析という、資本の理論におけるこの最も困難な部分の理

解を容易にしようとしたのだ、と考えることができる。

なお、価値形態論では価値形態がそれ以前につかみだされていた価値の本性ないし価値概念にもとづいて展開されるのだ、ということについては、マルクスの次の二つの記述を参照されたい。

「決定的に重要なことは、価値形態と価値実体と価値量とのあいだの内的な必然的関連を発見すること、すなわち、観念的に表現すれば、価値形態は価値概念から発生するのだ、ということを証明することであった。」

(『資本論』第1部初版, MEGA, II/5, S.43, 強調—マルクス。)

「われわれの分析は、商品の価値形態または価値表現は商品価値の本性から発生するのであって、逆に価値および価値量が交換価値としてのそれらの表現様式から発生するのではない、ということを証明した。」(『資本論』第1部, MEGA, II/10, S.61, 強調—引用者。)

おわりに

本稿では、難解と考えられているマルクスの価値形態論の内容を、学生諸君でも理解できるように、なるべく噛み砕いて説明することを試みた。そのかぎりでは、マルクスの価値形態論と異なる独自なことを述べたわけではないが、それについての従来の解釈とは大きく異なる解釈を述べたところがある。そのうちのいくつかについて、あらためて要点を述べておこう。

1. 価値形態論で分析されるそれぞれの価値表現は、いずれもそれを含んでいる諸商品の交換関係からつかみだされていることを強調した。マルクスの価値形態の展開は事実上そうなっていると考えられるが、マルクスは必ずしも、このことを明示的に述べていない。このことをはっきりと押さえることによって、はじめて、開展された価値形態から一般的価値形態への形態発展の必然性もよく理解できる。

2. そこで、その開展された価値形態から一般的価値形態への形態発展であるが、その理解を困難にするところでもあり、かつその鍵ともなるのが、それぞれの価値形態に含まれている「逆の連関」とはなにか、という

点である。

「連関する〔sich beziehen〕」とは、ある主体が他のものにたいして関係をもつことであり、「関わる〔sich verhalten〕」という語で言い換えることもできる。価値表現にあっては、主体は相対的価値形態にある商品であり、これが能動的に等価形態にある商品に連関し、関わって、後者を、そのいかなる助力をも借りることなく、価値表現の材料にするのである。「逆の連関〔Rückbeziehung〕」あるいは「逆の連関では〔rückbezüglich〕」というのは、このような「連関」の能動的な主体とその受動的な客体とのあいだの主体－客体の関係とは逆の主体－客体の関係を指している。そのような「逆の連関」は、どのような価値表現についても、価値表現そのものについては生じようがない。なぜなら、ある特定の価値表現は、特定の主体－客体の関係つまり特定の「連関」によって成立しているものだからである。だから、それぞれの価値形態そのものが、その左辺と右辺とを置き換えた「逆の連関」をそれ自体として含んでいるはずがないのである。ところがマルクスは、それぞれの価値形態に含まれている「逆の連関」について語り、しかも開展された価値形態から一般的な価値形態への移行にあたっては、まさに、開展された価値形態から、そのなかに含まれているその「逆の連関」の形態に移行しているのである。これをどのように考えたらよいのか。

すでに述べたように、この「逆の連関」は、それぞれの価値形態、価値表現を含んでいる交換関係のなかにあるものなのである。一商品の単純な価値表現を含む交換関係には、主体－客体を逆にした、もう一つの価値表現が含まれている。そのことをマルクスは、次のように書き表わす。

「等式 20 エレのリンネル = 1 着の上着 または 20 エレのリンネルは 1 着の上着に値する は、明らかに、同じ等式 1 着の上着 = 20 エレのリンネル または 1 着の上着は 20 エレのリンネルに値する を含意している。つまり、リンネルの相対的価値表現においては上着が等価物としての役割を演じているのであるが、この価値表現は

逆の連関では〔rückbezüglich〕上着の相対的価値表現を含んでいる〔enthalten〕のであって、それにおいてはリンネルが等価物としての役割を演じているのである。」（『資本論』第1部初版，MEGA，II/5，S.33，強調—マルクス。）

「第2の形態は、第1の形態の諸等式だけの総和から成り立っている。しかし、これらの等式のそれぞれ、たとえば 20 エレのリンネル = 1 着の上着 は、その逆の連関〔Rückbeziehung〕，すなわち 1 着の上着 = 20 エレのリンネル をも包括している〔einschließen〕のであって、ここでは上着が自己の価値をリンネルで表わしており、まさにそれゆえにリンネルを等価物として表わしている。」（『資本論』第1部初版，MEGA，II/5，S.36，強調—マルクス。）

「1 着の上着 = 20 エレのリンネル において、上着が自己の価値を相対的に、すなわちリンネルで表現し、そうすることによってリンネルが等価形態を受け取るとき、この等式は直接に、逆の連関〔Rückbeziehung〕，すなわち 20 エレのリンネル = 1 着の上着 を包括している〔einschließen〕のであって、ここでは上着が等価形態を受け取り、リンネルの価値が相対的に表現されるのである。」（『資本論』第1部初版，MEGA，II/5，S.39。）

これらの記述において、一方の等式が「逆の連関で」他方の等式を含んでいる、あるいは「逆の連関を包括している」と言うのは、一方の価値表現を含む交換関係が他方の価値表現を含んでいる、ということであるわけではない。そうだとすれば、初版本文で一般的価値形態が、「相対的価値の第3の、倒置された、すなわち逆の連関にされた〔rückbezogen〕第2の形態」（MEGA，II/5，S.36）と呼ばれ、また「逆の連関にされた〔rückbezogen〕第2の形態であり、したがってまた第2の形態において包括されて〔eingeschlossen〕いるところの形態Ⅲ」（MEGA，II/5，S.37）と言われているのも、まったく同様に、それぞれの価値表現を含んでいる交換関係のなかにある、主体—客体が逆の連関を指しているものと言わなければ

ばならない。

そうであるとする、開展された価値形態を、それを含む交換関係からつかみだしたとき、この交換関係にはすでに「逆の連関で」一般的価値形態が含まれていたことにならないであろうか。

3. この点が、本稿で述べた第3の積極的な論点であり、従来の議論のなかではおそらくまだ主張されたことのないものである。すなわち、単純な価値形態から開展された価値形態に移行するさいに、開展された価値形態をつかみだした交換関係は、言うまでもなく一つの商品と他の多くの商品との交換関係であるが、この交換関係にあっては、他商品はそれぞれこの一つの商品とだけ連関しているだけでいいのであって、だから、それらの商品がもつ価値形態は依然として単純な価値形態だということになる。だから、このような交換関係に含まれている「逆連関」は、さしあたり、ばらばらの単純な価値形態でしかないものであり、これらの商品は、主体的には商品世界を形成していない。

ところが、一般的価値形態は、すべての商品が共同で或る一つの商品を商品世界から排除し、それを一般的等価物にしているのであるから、それを含む交換関係は、いま見た交換関係と同じく一つの商品と他の諸商品との交換関係なのであるが、にもかかわらず、ここですでに、すべての商品が一つの商品世界を形成しているのであって、ここでの交換は、どの商品にとっても、もはや自己と他の単独の一商品との交換ではないのである。だから、交換関係の発展という観点から見れば、開展された価値形態から一般的価値形態に移行するさいに、一般的価値形態をつかみだしてくる交換関係と、単純な価値形態から開展された価値形態に移行するさいのそれとのあいだには、発展関係があるのだと考えなければならない。

もちろん、ここで言っているのは、交換関係の歴史的な発展過程やその発展段階のことではない。開展された価値形態を含む交換関係は、一つの商品が他の多くの商品ともつ交換関係であるが、単純な価値形態の総和である開展された価値形態を析出するときには、論理的に、多くの商品の

側では単純な価値形態をもつにすぎないものと想定すべきである。しかし、開展された価値形態がそれ自身のなかに潜在的に含んでいるより高次の価値形態を求めるときには、同じように一つの商品が他の多くの商品ともつ交換関係ではあっても、論理的に、他の諸商品がすべて同一の交換場面において一つの商品と交換しようとしているような交換関係を想定する必要があるのである。

しかし、このことを、交換の歴史的な発展のなかに置いて考えてみることもできるし、また、そうすることによって発展関係をより鮮明にイメージすることができる。すなわち、開展された価値形態が析出されてくる交換関係に対応する歴史的な交換関係とは、ある狩猟民族なり遊牧民族なりが、各地の民族と交換するが、それらの民族のほうでは、この民族とだけ交換している、というものである。これにたいして、一般的価値形態を含む交換関係に対応する歴史的な交換関係とは、一方では、それらのさまざまな地方ですでに局地的に商品交換が發展し始め、そこでの諸商品がいずれもこの民族の商品あるいはそれ以外のなんらかの特定の商品と交換しようとする、そのような関係であるか、あるいは他方では、各地の民族のあいだでの商品交換が始まって、どの民族も互いに商品所持者として一つの商品世界に属していることを知っており、その上で、彼らがいずれもこの民族の商品と交換しようとする、そのような関係であろう。いずれにしても、ここには、明らかに交換関係の發展がある。

このように、開展された価値形態をつかみだした交換関係と、一般的価値形態をつかみだす交換関係とは、一つの商品と他の多くの商品とが取り結ぶ交換関係という、その形態から見るかぎりまったく同一のものでありながら、前者にあっては、他の多くの商品がそれぞれ独立の交換場面にあるものと想定されるのにたいして、後者にあっては、他のすべての商品が同一の交換場面において一つの商品世界を形成しているものと想定されているのである。

ただし、このことは、『資本論』におけるマルクスの叙述から明示的に

読み取ることにはできない。その決定的な理由は、おそらく、交換関係のこのような発展は、価値形態の発展それ自体に属するものではなくて、のちの交換過程論にはいつてはじめて明らかにされるものであるところにあるのであろう。とりわけ、初版本文での叙述では、価値形態の背後にある交換関係への言及は、徹底的に避けられている。そのことは、いま引用した初版本文からの三つの引用からも明らかに読み取れるであろう。マルクスは、「逆の連関」について語りながら、それを含んでいる交換関係については直接には言及しないのである。しかし、初版付録以降の叙述では、初版本文でも暗に想定されていたそれぞれの交換関係に次第にはっきりと言及するようになる。モストの書での彼の叙述は、それを明示的に述べたものだと言うことができるのである。

このように理解することによって、開展された価値形態のなかに一般的価値形態が即自的に含まれているということの意味が明瞭になる。開展された価値形態がそれ自体としておのずから一般的価値形態に移行することはないが、「逆の連関」による移行によって、開展された価値形態を含む交換関係の発展とともに新たに成立する価値形態は一般的価値形態であるほかはないことが明らかにされているのである。

以上の3点が、本稿で提示した価値形態論理解の新視点である。そこで、このような理解に立つとき、価値形態論が貨幣発生論にとってどのような意味をもつものであるかということについて、貨幣発生論の他の側面との対比において、簡単に述べておこう。

まず、貨幣の成立については、一般的等価物の機能を社会的に独占する商品が成立することと、その商品が金銀、最終的には金であったこととの区別が必要である。後者については、金が一般的等価物の機能および貨幣の諸機能を果たすのに最も適した自然属性をもつことによって説明されるが、これは交換過程論でなされている。

この問題を別とすると、貨幣成立論には三つの側面がある。

第1には、価値がとる形態である価値形態が、どのような発展を通じ

て、最終的に貨幣形態に到達するのか、という問題である。これは、どのような形態を通過しなければならないのか、ということを明らかにするという意味で、価値の形態発展の必然性の問題と言い換えることができる。この問題は、価値形態論で説明されている。

第2には、なぜ労働生産物が商品形態を、そして最終的には貨幣形態を取らずにいないのか、という問題である。これは、商品形態および貨幣形態そのものの必然性の問題であって、物神性論で説明されている。その要は、労働における人と人との関係に、具体的には、直接的には私的な労働である社会的総労働が社会的分業を形成しているという独自の生産関係にある。

第3には、価値形態を発展させて、ついに貨幣形態を成立させるにいたる原動力はなにか、という問題である。これが、狭い意味での貨幣成立の必然性の問題であって、交換過程論で論じられている。その要は、一方で、商品の内在的な矛盾である使用価値と価値との矛盾が、交換過程では、商品の使用価値としての実現と商品の価値としての実現との矛盾として現われ（交換過程の矛盾）、これが、ある一つの商品を商品世界から排除して一般的等価物にする社会的な共同事業を引き起こさないではない（開展された価値形態から一般的価値形態への発展をもたらさないではない）ということであり、他方で、商品交換の歴史的発展（このこと自体は、商品生産そのものによっても、価値形態によっても、交換過程そのものによっても説明できることではなく、社会的生産過程の歴史的な発展によってのみ理解できるものである）が、一般的等価物の機能を特定の商品に癒着させて貨幣を生み出すにいたる、ということである¹⁾。

以上の三つの側面を、端的に言い表わしたものが、マルクスの、「いかにして、なぜ、なにによって、商品は貨幣であるか」（『資本論』第1部、MEGA, II/10, S.89）という一文であることは、久留間鮫造氏が明らかにされたとおりである。このことについては、別稿²⁾で述べたし、久留間氏の『貨幣論』でも詳しく述べられている³⁾ので、ここでは以上にとどめる。

- 1) 物神性論の課題については、別稿「商品および商品生産」の第3節で、交換過程論の課題については、同稿の【補論4】「交換過程と貨幣発生 of 必然性」でそれぞれ述べているので、参照されたい。
- 2) 「貨幣生成論の問題設定とその解明」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第8号、1989年10月。
- 3) 久留間敔造『貨幣論』、大月書店、1979年、11-88ページ。

(1993年11月13日)